



SEAMAIL

Newsletter from Software Engineers Association

Volume 4, Number

9

1989

目次

編集部から	1
ソフトウェア技術の標準化をめぐる	
-SEA 6月フォーラムの事前および事後アンケート-	2
開発環境およびストレス調査報告への感想	9
シリコンバレーを楽しむために - その1 -	大神原 薫 12
第2回日中ソフトウェアシンポジウム拾遺	19
FSFってどんなところ? -関興分科会・5月例会から-	32
会員の声	36
近頃アタマにきたことども	39

ソフトウェア技術者協会 (SEA) は、ソフトウェアハウス、コンピュータメーカ、計算センタ、エンドユーザ、大学、研究所など、それぞれ異なった環境に置かれているソフトウェア技術者または研究者が、そうした社会組織の壁を越えて、各自の経験や技術を自由に交流しあうための「場」として、1985年12月に設立されました。

その主な活動は、機関誌 SEAMAIL の発行、支部および研究分科会の運営、セミナー／ワークショップ／シンポジウムなどのイベントの開催、および内外の関係諸団体との交流です。発足当初約200人にすぎなかった会員数もその後飛躍的に増加し、現在、北は北海道から南は沖縄まで、1650名を超えるメンバーを擁するにいたりました。法人賛助会員も約60社を数えます。支部は、東京以外に、関西、横浜、長野、名古屋、九州の各地区で設立されており、その他の地域でも設立準備をしています。分科会は、東京、関西、名古屋で、それぞれいくつかが活動しており、その他の支部でも、月例会やフォーラムが定期的に開催されています。

「現在のソフトウェア界における最大の課題は、技術移転の促進である」といわれています。これまでわが国には、そのための適切な社会的メカニズムが欠けていたように思われます。SEAは、そうした欠落を補うべく、これからますます活発な活動を展開して行きたいと考えています。いままで日本にはなかったこの新しいプロフェッショナル・ソサイエティの発展のために、ぜひとも、あなたのお力を貸してください。

代表幹事： 岸田孝一

常任幹事： 白井義美 久保宏志 熊谷章 佐藤千明 藤野晃延 松原友夫 吉村鉄太郎

幹事： 青島茂 天池学 飯沢恒 岩田康 岡田正志 落水浩一郎 片山禎昭 川北秀夫 岸勝義 杉田義明 武田知久
田中慎一郎 玉井哲雄 玉井滋 中來田秀樹 中園順三 中野秀男 野村敏次 野村行憲 針谷明 平尾一浩
深瀬弘恭 藤本司郎 北條正顕 細野広水 盛田政敏

会計監事： 辻淳二 吉村成弘

常任委員長： 白井義美 (技術研究) 久保宏志 (企画総務) 藤野晃延 (会誌編集) 杉田義明 (セミナー・ワークショップ)

分科会世話人 環境分科会(SIGENV): 田中慎一郎 渡邊雄一

管理分科会(SIGMAN): 相沢圭一 川北秀夫 芝原雄二 野々下幸治

教育分科会(SIGEDU): 大浦洋一 杉田義明 中園順三

ネットワーク分科会(SIGNET): 青島茂 野中哲

法的保護分科会(SIGSPL): 能登末之

CAI分科会(SIGCAI): 大木幹雄 中谷多哉子 中西昌武

ドキュメント分科会(SIGDOC): 田中慎一郎 野辺良一

支部世話人 関西支部: 白井義美 中野秀男 盛田政敏

横浜支部: 熊谷章 林香 藤野晃延 松下和隆

長野支部: 小林貞幸 佐藤千明 細野広水

名古屋支部: 岩田康 鈴木智

九州支部: 植村正伸 小田七生 藤本良子 平尾一浩 松本初美 中島泰彦 後藤芳美

SEAMAIL編集グループ: 岸田孝一 佐原伸 芝原雄二 関崎邦夫 田中慎一郎 中村昭雄 長井修治 成沢知子

野辺良一 藤野晃延 渡邊雄一

SEAMAIL Vol. 4, No. 9 平成元年10月27日発行

編集人 岸田孝一

発行人 ソフトウェア技術者協会 (SEA)

〒102 東京都千代田区準町2-12 藤和半蔵門コープビル505

印刷所 サンビルト印刷株式会社 〒162 東京都新宿区築地町8番地

定価 500円 (禁転載)

編集部から

天高く．．

「大粒の栗三個でご飯一膳分のカロリーがある」ということを知って、少しショックを受けている今日この頃です。皆さんはいかがお過ごしでしょうか。栗に限らず、こうして空が高く、気候がしのぎやすくなるにつれ、食物のオイシクなるのは皆さんとて同じこと。寝る前の読書に、ビールとおつまみの参加率が高くなっている、という向きも多いのではないのでしょうか。

今はもう10月．．

編集部とはいえば、「やっとうと月遅れにまで、漕ぎつけたなァ．．」と、このページを残してまたもや機上の人となった某氏。刷り上がって来ての「楽しい発送」の時には、是非日本にいて欲しいと願っています。よろしくね。

ご協力ありがとう．．

さて、この号は、アンケートその他により非常にバラエティに富む内容となりました。ご協力くださった皆さん、どうもありがとうございました。中でも大神原さんの「シリコンバレーを楽しむために - その1 -」は大変な力作で、原稿不足に悩む編集部一同、大いに感謝しております。次号にも続編が載る予定です。皆さんも是非見習って、編集部を助けてください。

ご意見募集中．．

ところで、今回の巻頭記事、「ソフトウェア技術の標準化をめぐる」はいかがでしたでしょうか。これは、6月の月例フォーラムを軸に、事前アンケート、事後アンケートをまとめたものです。今後、できれば各種の技術標準のための分科会もしくはワーキング・グループを発足させたいと考えていますので、是非ともご意見ご感想を事務局までお寄せください。

それにしても今回は、「フォーラムで使ったOHPの欲しい方はこのアンケートに答えてね」といったら、こんなにたくさんの回答が寄せられました。ちょっと驚きです。ちょっとした「おまけ」をつけると回収率がいいようなので、今後もこういう手を使っていこうかなと考えています。

レポート募集中．．

また、恒例の秋のセミナー・ウィーク（9/19～21）も無事終えることができました。今回は新しい試みとして、レポートのボランティアを募集してみましたところ、7名ほどのご協力を得ることができました。いずれ近いうちにご報告できると思います。レポートの方、大変でしょうが頑張ってください。

なおSEAでは、今後もこのような形でイベントのレポートを優遇していきたいと考えています。ご自分の興味のあるイベントがあった時、レポートをやってもいいなと思われましたら、是非名乗り出てください。もちろんある程度の成果は要求されますが、イベントにただで参加できるくらいの支援は可能だと思っています。やりっぱなしのイベントってちょっと悲しいですからね。

留守番テープ．．

編集部もそうですが、ボランティアベースのSEAは事務局にも人手がないのです。流行の留守録をしばしば使っていますが、どうかご理解ください。会員の方も慣れないとなかなか抵抗があるようですが、無言で切れているところもちょっと悲しいので、是非何かメッセージを入れてください。どうしても苦手な方や、単なる連絡事項でしたら、FAXを大いに利用してください。住所変更などはその方が確実です。

お詫びとご連絡

前回お送りした SEAMAIL Vol.4, No.6-7-8 はちょっと分厚くて、いつもと違う封筒を使って発送しました。ところが、ラベルのつきが悪かったらしく、なんと7～8通戻ってきてしまいました。この号を手にして、前号が抜けていると気がつかれましたら、ご一報ください。失礼いたしました。

(FAXでお名前と会員番号を書いて送ってください。)

(なつき)

ソフトウェア技術の標準化をめぐる

SEA 6月フォーラムの事前および事後アンケート

1. 最初のアンケート

3月の幹事会で深瀬さん（アスキー）から、「プロフェッショナル集団としての SEA は、将来の自分たちの仕事に影響を与える各種の技術標準（OS, 言語, 通信プロトコル, インタフェイス等）の検討にもっと積極的に関与すべきだ」という提案があり、大方のコンセンサスを得ました。

そこで、まず4月に会員を対象として、標準化に関するアンケートを行いました。その時のレスポンスは以下の通りです。

[Q1] あなた自身どうお考えですか？

- | | |
|------------------------|----|
| ◇賛成（そのための分科会またはWGを作ろう） | 32 |
| ◇反対（他の団体にまかせておけばよい） | 0 |
| ◇どちらともいえない | 9 |

[Q2] 標準といってもさまざまですが、あなたの主要な関心事は？

◆松本 豊

- (a) BSD, MACH, GNU, X, Workstation
- (b) JUNETを補うための Commercial-Based Unix Network

◆河内山 文弘

- (a) OSI
- (b) UNIX

◆木村 一郎

- (a) OS
- (b) Window
- (c) Documentation

◆稲垣 浩一

- (a) Unixの標準化

◆臼井 義美

- (a) ユーザ・インタフェイス
- (b) 設計仕様
- (c) ソフトウェア DB

◆小林 貞幸

- (a) 言語

◆宮下 高弘

- (a) システム開発の作業標準

◆渡辺 雄一

JISの動向など、もっとオープンでよいと思っているのですが....

◆熊谷 章

- (a) 言語
- (b) ツール間インタフェイス (PCTE)

◆尾形 修一

- (a) ユーザ・インタフェイスとその構築ツール

◆西崎 勝雄

- (a) OS
- (b) ツール間インタフェイス (PCTE)
- (c) ソフトウェア DB

◆中來田 秀樹

- (a) フォントが欲しい！！

◆岡村 博

- (a) Realtime OSの機能および上位 I/Oインタフェイス
- (b) 通信プロトコル
- (c) 言語（仕様と処理系）

◆高本 賢治

- (a) 言語

◆門岡 春雄

- (a) 設計手法

◆富永 伸哉

- (a) OS(Unix)の標準化の動向

◆福島 智香子

- (a) 設計手法

◆中島 敬彦

- (a) ウィンドウ（ユーザ・インタフェイス）
- (b) OS

◆永田 和也

- (a) テスト手法
- (b) プロジェクト運営

◆平尾 一浩

- (a) インタフェイス
- (b) 通信

◆逸見研一

- (a) ウィンドウ・システム

◆川上 優

- (a) 通信プロトコル
- (b) OS

◆西郷 正宏

日本語としてのコンピュータ用語（フレーム、カタログ、ブロック、レイヤー...etc）などは、メーカーや OS、機種等によって、まったく異なります。「文化の違いよ」といってしまえばそれまでですが、工業的な規格より、コトバのコンセンサスのほうが SEA の仕事に近いのでは？ コトバの障壁のほうが人をへだてる力が大きいと私は感じます。

◆祖父江利子

- (a) OS. しかし Unix ひとつとっても大変ですよネ.

◆水谷 哲也

- (a) 成果物の標準
(もう少し建築のように作るものの規格やフォーマットが固定できないか?)
- (b) ソフトウェア作成工程の標準
(プロセス・プログラミング)

◆松沢 好男

ドキュメントについてはもちろんだが、プログラムのあり方：たとえば

- 障害時どういう処置で終わるのがベターか？
- 通信ネットワークでどういうプロテクトをかけるか？
- 障害時の MMI をどうするのが親切か？

などの標準はないものだろうか？

◆久保 宏志

- 「なぜ SEA が標準化か？」を確認する.
- SEA による標準化のガイドラインを作る.
- テーマのポジティブ/ネガティブ・リストを作る.
- オープン・アーキテクチャ言語を考察する.

以上は結論のみ。詳細は 2. 参照.

◆椎熊 敏朗

- (a) OS
- (b) 言語
- (c) インタフェイス

◆内藤 昌彦

単にソフトウェアだけでなく、ハードウェアや操作マニュアルを含めたドキュメントの標準化を考える必要があるのでは？

◆田村 整

- (a) OS (Unix 以外も含めて)
 - できれば東京中心でなく活動してほしい.
 - また SEAMAIL 上での意見交換の場もほしい.

◆新田 稔

- (a) ツール類のユーザ・インタフェイス
- (b) エンジニアとしての能力基準

◆横山 博司

- (a) OS
- (b) エディタ

◆木村 陽一

- (a) マン・マシン・インタフェイス

◆長井 修治

- (a) インタフェイス (MMI)
- (b) 通信プロトコル

ただし最終的にはメーカー等の業界が動かないと趣味に終わってしまう気がする.

◆門岡 春雄

- (a) 設計手法 (汎用機 AP の基本設計から本番まで)
- (b) およびその支援システム

◆岸本 剛一

- (a) OSI
- (b) MAP/TOP

◆木全 洋

- (a) OS (Unix)
- (b) ウィンドウ
- (c) 言語

2. 久保さんのメッセージ

このアンケートに対して、久保宏志さん（富士通）から、別紙の形で、次ようなメッセージが寄せられました。

SEA が標準化に関与するというアイデアはおもしろい。分科会活動が必ずしも活発とはいえない現状で、標準化活動に積極的参加があるとは考えにくいですが、そのことをひとまずおいて、おもしろいと思う。検討に値する。よって私の回答はとりあえず「賛成」である。以下は賛成理由の説明である。

SEA のような団体がなぜ標準化について発言し貢献しなければならないか、から議論を始めるのがよい。この議論自体が標準化への貢献になる。この議論から、どのような SEA のスタンスが導かれるかは分からないが、固有のスタンスがありうると確信する。

学界や業界団体は必ずしも自由ではない。理論的には、学界は業界団体と違ってよいが、標準化に着眼して見かぎり、日本の場合、両者のスタンスのあいだに実質的な差はない。参加企業のあいだの利害の対立を調整することが、

標準化作業そのものとなる。各社の仕様が不必要に違っている。そろそろ仕様をそろえないと商売に支障をきたす。こんなところから標準化が始まる。どうしても、標準化の定義を狭く設定することになる。かつまた、標準を導き出すのに膨大な時間を費やすことになる。

SEA が完全に自由であるとは思わないが、何を取り上げ、どんな標準を作るかについて受ける制約は、学界や業界団体が受けるそれと比べるとはるかに小さい。学界や業界団体ができないことをやる、それらの団体の活動を補う、それらの団体の活動をチェックする、という立場をとることができる。

自由である分、影響力の行使は制約を受ける。学界や業界団体の活動に対する意見を出しても、それを普及徹底するための手立ては乏しい。意見を学界や業界団体に出しても重視されることはあるまい。標準に従わないと損をするような仕組みを作ることが SEA にはできない。

このような制約を比較的受けにくい方法で活動することを考える必要がある。いわゆる事実上の標準なるものを作り、それを広く社会全体の公共的価値として広めることはできる。力と金があれば、De Facto Standard Free Software を著し、SEA の著作物として世界に広めることに何の制約もない。

一般論はこれくらいにして、1つだけ具体的なテーマを提案する。

エドワード・ヨードンさんが「オープン・アーキテクチャ言語」ということをいっているらしい。あらゆるマシン、OS、DBMS、通信プロトコル、ウィンドウ・システム等から独立した言語を作ろうという提案である。これをヒントに「オープン・アーキテクチャ言語」の検討を提案する。

学界や業界団体は、それなりに標準化活動に熱心であり、影響力のある大企業が自らの仕様を公開する機運にはある。しかし、そのような動きの結果として、プログラマから見ても望ましい統一的なアプリケーション・プログラム環境ができるまでには時間がかかる。その実現を待機するのではなく、さまざまなマシン、OS、DBMS、通信プロトコル、ウィンドウ・システムが存在するアプリケーション・プログラム環境の現実の中で、できるだけそれらの差異から独立でありうるよう、アプリケーション記述用の言語を作るのである。

このテーマと逆に、SEA が取り上げない方がよいテーマもある。例示されている OS、言語、通信プロトコル、インタフェースは、関わりを持たない方がよい。すでに既存の組織が活動しているからである。意見のある人は、

SEA の場ではなく、所属企業や所属団体の代表として活動に参画するのがよい。下手に SEA が口出ししても混乱を増すだけの効果しかない。負けいくさになることは予めわかっている。他人がやっていないことを SEA のアドバンテージに立脚してやる。この線を踏み外さないことが大事である。

3. 6月フォーラム

以上のアンケート結果を踏まえて、6月の SEA フォーラムは、「ソフトウェアに関する標準化活動の現状と展望—プロフェッショナル・ソサイエティとしての SEA はどう関与すべきか?」と題して、6月28日(水)午後、東京港区の機械振興会館で開催された。呼び掛け文は以下の通り:

ソフトウェアに関連する各種技術の標準化をめぐる状況は、近年、とみに複雑になってきています。一昔前のように、ISO、JIS、CCITT といったごく少数の標準規格を考慮するだけでは不十分であり、また、単にコンピュータや電子・通信といった関連産業のみならず、他のさまざまな産業分野との関わりも無視できなくなりつつあります。

そこで、6月の月例フォーラムでは、さきごろ日本標準調査会から建議されたばかりの「情報技術標準化の推進について」を議論の手掛かりとし、これまで標準化活動に関わって来られた何人かのスピーカをお招きして、それぞれの立場から、ソフトウェア技術標準化の現状における問題点や今後の展望をお話いただき、専門家集団としてのわが SEA におけるこれからの取組み方を議論してみたいと思います。

先日行なった会員アンケートでも、OS、言語、ユーザ・インタフェース、設計技法、ドキュメンテーション、開発プロセスなど、さまざまな角度からの標準化に関して、かなり多くの方が積極的な関心を示されていますので、活発な討論の展開が期待されます。多数の御参加をお待ちしています。

当日の参加者は約40名弱であった。パネル・メンバーは以下の通り:

深瀬弘恭(アスキー) — 司会

三上喜貴(通商産業省)

松原友夫(日立 SK)

中原 康(東芝)

三上さんは、工業技術院標準部の立場から、日本におけ

るコンピュータ技術標準化活動の仕組みやその問題点をお話しされた。松原さんは、JISA の標準化委員長としての長年にわたる ISO 関連の国際活動の経験から、草の根ボランティア型の欧米における標準化の考え方と、「お上」意識に裏打ちされた日本的標準化との摩擦を、そして中原さんは、Unix に関連する国際的標準化の動きのなかで、どうしても遅れがちになる日本の対応を、それぞれ具体的に解説された。

また、当日飛び入りで東京情報大学の芝野先生（もと日本 IBM）が参加され、DBMS の Query 言語に関する標準化活動の経験から、一見お役所主導に見える日本の標準化活動も実は多くのボランティアたちの努力に支えられていることを話された。

これらのプレゼンテーションのあと、討論に入り、会場からの活発な質疑を交えて、時間一杯熱心な議論が続けられた。もちろん短時間に結論が出るような話ではなく、いくつかのオープン・クエスチョンが出たまま終わったが、主な話題は、これから日本でも欧米風のボトムアップ的な標準化活動が必要であること、しかし、それを支える社会的メカニズムをどう作ればよいか、そのさいに SEA の果たすべき役割は如何、といったことであった。

4. 事後アンケート

フォーラム終了後、当日の参加者全員に対して、次のようなアンケートを郵送した：

- Q1. 今回の Forum を聞いての御感想をひとこと。
- Q2. 幹事会での議論やみなさんに配布したミニ・アンケートの結果から見て、今後 SEA としても、ソフトウェア技術の標準化問題に取り組んで行くべきでしょうが、具体化にさいしては、いろいろな困難が待ち受けていると思われま。この点について、あなたはどのようにお考えですか？
- (2-1) 検討すべきテーマの選定について
- (2-2) 実際の標準化検討作業について
- (2-3) 国内外の他団体との関係について
- Q3. ソフトウェア関係の標準化は、大きくわけて、
- (a) Specification (言語や OS の仕様や、インタフェイス規格など)
- (b) Guideline (開発工程や作業手順、ドキュメントの構成などの規範)
- の2種類に分かれています。それぞれのカテゴリにおいて、あなた自身が強い関心を抱いている標準化のテーマはどんなことですか？ それぞれ3つずつあげて

ください。

これに対し13人の方々が回答を寄せられた。以下に紹介する（到着順）。

Q1. フォーラムを聞いての感想

◆野村 敏次

いわゆる現場における標準化に対する認識と、公的な機関(?)における標準化の認識の間には、ある種のギャップを感じる。企業は、もっと国内外の標準化動向に目を向け、協力姿勢をとる必要があると感じる反面、国際会議等に出席されて日本としての意見を述べられている方々も、現場が何を標準化して欲しいと望んでいるかを的確に把握して欲しいと思う。

◆橋本 輝信

日立 SK 松原友夫氏の「ソフトウェア標準化について」のお話はわかりやすく参考になった。

◆馬渡 恭三郎

焦点が定まらない感じだった。何のための標準化か。そのためにはどうすればいいのかということに的を絞るべきだったと感じる。

◆鋤持 和夫

国際間での標準化と、国内での立場（標準化への対応）のあいだに、相当ギャップがあると感じた。やはり、標準という作業は対象が広範になるので、規約や普及が難しいという印象を持った。ソフトウェアに関しては、いままでの様に標準無視の風潮は打破していかねばならないと感じた。

◆永岡 ゆかり

生きている標準化をかいま見ることができたと思う。初めてのフォーラム参加ということもあったが、通常の講演のように一方通行ではなく、この中からあなたはどのように考えるかを問いかけられたように感じた。

◆松原 友夫

私の「標準化は所詮、低技術レベルの決めごと」という意見にかなり反論があり、あえて論バクしなかった。たしかに規格開発という言葉が示す研究的な内容を含む規格には、かなり複雑な内容を含むかも知れないが、所詮は同じ要求の中で幅広い選択の中の一つを決める作業であることには変わりはない。

◆岸野 直樹

標準化がアーキテクトの問題であり、きわめて技術的な問題であるという芝野先生の意見に賛成だ。また、標準化

によって自由がもたらされなければならないという松原さんの指摘も印象的である。

◆志賀 方宣

標準化というと窮屈なイメージを受けます。知らない所でトップダウンで決められ、結果だけが知らされ、服従を強いられるという場面が多いからでしょう。しかしこの巨大な情報社会で大多数のコンセンサスを得て決めることもまた、不可能でしょう。

◆坂根 正幸

総論賛成しかし実際には大変だと思う。標準化によって、各企業の特長を殺してしまったり、将来の発展を止めてしまったりは何にもならない。互いにバラバラでありながら協力しあって作業ができるような共通ベースがほしい。

◆椎熊 敏朗

今回のフォーラムに参加して、特に印象に残ったこととして、技術者の側からの「自分達の提案や意見を反映させる場がない」という主張に対して、規格を決めている側から、「我々は多くの人の発言を求めているがなかなかそのような声が入ってこない」というやりとりがあったことです。このギャップに現在のソフトウェア産業の構造上の問題が隠されているように思われます。

◆針谷 明

標準化のために活動することは大変なことで、検討するためのメンバーも多種多様に、しかもなるべく情熱のある人を多く集める必要があると思った。

◆熊谷 章

日本のコンピュータ産業の中で、標準化がなぜ重要であるかが、産学官の中でよく理解されていないと感じた。特に、標準化の活動に対する、官の理解の仕方と対応には多くの疑問を持った。ANSIやECMAのプロモーションとは段違いの差があり、がく然とするばかりであった。

◆田中 浩之

具体的に標準化に関係している方々の御意見を聞けて、標準化の実際問題に触れることができるよい機会であった。

Q2. SEAにおける標準化活動

◆野村 敏次

日本の標準化は、今までの状態を見る限りにおいては不透明であり、体制(組織)的にどうなっているのか、また、強制力が働くのか否か、等においてわからないことが多すぎるし、わからせようともしていない。しかし、仲間同志で集まって標準を作ってみても、自己満足で終わりそうなので、この際、制度/体制的な面の明確化を図り、それを国際的にもオーソライズされるような形を作っていくこと

から始めたい。

◆橋本 輝信

当社には一応、ソフトウェア開発標準化委員会があるが、昭和61年5月7日の委員会以降休眠状態となっている。ソフトウェアの標準化が困難なことを立証している。

◆馬渡 恭三郎

(1) テーマ選定のためのフォーラムを設け、その中でテーマについて検討し、コンセンサスができれば、テーマごとのSIG(WG)を発足させる。

(2) SIG(WG)を設け、該当テーマについて現状を調査し、標準化の状況に応じた活動を行なう(レビュー、問題点の検討、ニューアイテムの提案、普及活動など)。

(3) テーマが定まれば、関連団体とコンタクトをとり、状況説明をしてもらい、ワークショップについて話し合う。

◆鍛持 和夫

(1) ソフトウェアの部品化等の標準技術を、言語や作成技法や最近のオブジェクト指向化等より行なうべき移植性と交換性についてのテーマ、EWSの各種技術の標準。

(3) IEEE(POSIX)やISO(言語のマルチバイト化)やANSI(C言語)関係の情報を得る為に活動すべきだ。

◆永岡 ゆかり

日本で主導権をとれる技術分野と、そうではない分野とをできるかぎり明確に分けて、焦点がぼけないようにする。場をつくること、意識を高めることなど、「急がば回れ」的な進め方をせざるおえないテーマであると思える。

◆松原 友夫

(1) ISO, IEEEなどの組織の底辺にあるのと同様、エキスパート集団が構成できるテーマに限ってテーマを選定すべきだ。これができれば一つでもよいし、できなければやめたほうがよい。

(2) 電子メールまたはFAXをベースにし、たまに集まる形式。こうした討論のやり方に、SEAが日本で先鞭をつけることができるのではないかと。

(3) 標準化の審議は、本来、エキスパート集団の自由討論で行い、最後に決める時のみ投票ルールに依る。したがって、エキスパートとしての意見を公式ルールに出せるチャンネルを作る必要がある。国内がよいか直接国外がよいかは、相手の委員長の考えに大きく影響を受けるので何ともいえない。

◆岸野 直樹

(1) SEAのメンバーの中には、製品をインプリメントすることに責任のある立場の人は少ないと思う。したがって、ソフトウェア/ハードウェアの利用技術という観点でテーマを選定してはどうか。

(2) 標準化は、適用可能領域を規定した上で成立する相対的なものであるというのが私の基本的認識である。したがって、SEA全体に適用可能なレベルをただちに求めるよりは、各企業・プロジェクト等の標準化事例を相互に発表しあうことにより、自然発生的に全体的な標準化の方向づけが可能になるのではないか。

◆志賀 方宣

(1) 身近なテーマから選定した方がよい。

(2) 標準はボトムアップ(小さい所からの)、標準はドライブ(変更が容易)、標準はソフト(細かいところは自由に)、標準はシンプル(複雑な決めごとは使われない)。

(3) まず、どの団体を何を検討中かが見えるようになることよい。次は、同じ内容を検討中の団体と意見交換出来るようになることよい。

◆坂根 正幸

(2) すでに標準化作業の進められているテーマに対しては、積極的に他団体に入って行き、SEAとしての意見を反映するように努力する。また、その経過をSEAのメンバーにフィードバックする。

◆椎熊 敏朗

(1) 「我々はユーザの代弁者である」という立場から、一般に問われている各種の問題点について、会員より意見を収集し(アンケートでも可)、その中で最も共通の話題となるようなものを抽出する。ポイント>は、プログラムの趣味本位(学者もどき指向)に走るのではなく、ユーザ・オリエンテッドなポリシーを持つ。

(2) 規格案を出すことよりも、多くの人が参加できる意見交換の場が必要。テーマを選定したら、それをたたき台として、フリートークのような形で行なう。そのための媒体が必要だし、あるいは名簿を公開して会員同志の相互の意見交換を促す。

<備考> このことはjunetに参加されている方は比較的容易にできるでしょうが、我々「カヤの外の人間」には話し相手を見付けるのも大変です。

(3) 意見交換や提案の場があれば、積極的に利用すべき。ただし、従属的な立場になってはならない(特に大手メーカーに牛耳られている日本の標準化団体には要注意)。あくまでも対等の立場で望むこと。海外の諸団体との関係は、非常に有意義な点が多いと思います。ただこの活動に関して所属企業の理解を得られていない者にとって、海外でのイベントや会合に参加することは、本人の意欲にかかわらず時間や費用の面で難しいでしょう。

◆針谷 明

(1) いくつかテーマを挙げて参加メンバーを募集し、活

動できそうなテーマを選定する。募集は実際に参加できる人、メールやFAXなどでの発言およびドラフトのチェックなどに参加する人を、区別して募集する。

(2) 場所・時間・運営・費用などが問題になると思われるが、参加メンバーにもよるのでよい案が浮かばない。ただし、参加メンバー募集までに大枠を決めておく必要があると思う。

(3) 主導権はどかが取るかは別として、他の団体・メーカーなど広く呼びかけ、オープンにした方がよいと思う。

◆熊谷 章

(1) 具体的にやるべきだと思う。興味がある人、実際に仕事で開発作業をしている人などが集まり、その中で討論に決めればよい。

(2) 1日/月のミーティング(1日)位のタスクとし、実際の仕事は出席メンバーの宿題とすればよい。

(3) ANSI, IEEE, ECMA, およびアジアの関係団体と連体した方がよい。

◆田中 浩之

(1) 対象となる領域は非常に広範囲となるが、その中からのテーマ選定は、どれだけ実際に作業するメンバーがいるかという観点からの選択になるのが、現実的ではないだろうか。

(2) さまざまな考えをもつ個人・団体の意見を求める作業であることを考えると、メンバーの所属団体等のバランスをとれた形で作業を進めて行かざるを得ないのではないか。

(3) JIS, ISOのみではなく、似たような形で標準化作業を行っている所があるのだから、それらと連絡し合いながら作業を進めるべきだろう(少なくともどの団体が何をやっているかの事前情報を知らしめるのがよいと思う)。

Q3. 具体的テーマ

◆野村 敏次

これは、非常にジレンマに陥るところである。ソフトウェア開発においては、強制力のあるスペシフィケーションが望まれるが、言語やOSの仕様の標準化は、恐らくメインフレームの思惑が働き、決定はされないとされる。一方、ソフトウェアハウスにとっては、ガイドラインの類のほうが決めやすいし、実現の可能性もあると思うが、しかし、開発現場では、そうした標準のメリットに疑問を感じる人間が多く、あまり使われないのではないだろうか。

◆馬渡 恭三郎

カテゴリ(a)

1. OSI 通信標準

2. DB 関連

カテゴリ(b)

1. 開発工程
2. ドキュメンテーション
3. バージョン管理

◆鍛持 和夫

カテゴリ(a)

1. OS
2. 言語
3. 各種インタフェイス

◆永岡 ゆかり

カテゴリ(a)

オブジェクト指向言語

◆松原 友夫

カテゴリ(a)

SEA の性格から考えて、MMI や OS.

カテゴリ(b)

これはどちらかというと体制側の課題.

◆岸野 直樹

カテゴリ(a)

1. OODB インタフェイス
2. 分散 DB アクセス
3. SWDB インタフェイス

カテゴリ(b)

1. ユーザー・プロファイル
2. ドキュメント管理規範
3. リスク管理

◆志賀 方宣

カテゴリ(a)

1. Unix
2. ウィンドウシステム

カテゴリ(b)

1. ドキュメント構成
2. マニュアル構成

◆椎熊 敏朗

カテゴリ(a)

1. アプリケーションの互換性
(ソース, 中間コード)
2. データ・フォーマットの互換性
(マルチメディア対応)
3. 日本語関連 (フォント, コード, 辞書,
フロントエンド, 言語処理系の対応)

カテゴリ(b)

1. 品質管理手法

2. 開発工程モデル

3. 工数見積り手法

作業標準については、現場レベルで各自が常に改善と革新を行っていくべきもので、グローバルな標準を決めるのは、好ましいとは思えません。

◆針谷 明

カテゴリ(a)

1. 言語
2. データベース
3. 通信プロトコル (異機種間接続)

カテゴリ(b)

1. 開発工程
2. 設計仕様
3. コンピュータ用語

◆熊谷 章

カテゴリ(a)

1. End User Interface
2. User Interface
3. Know-How の表現法

カテゴリ(b)

開発方法論

◆田中 浩之

カテゴリ(a)

1. ユーザーインタフェース関係のソフトウェア
2. 言語
3. OS

カテゴリ(b)

1. システム開発の作業手順
2. 仕様書フォーマット
3. テスト手法

5. さてこれから

3月の幹事会での議論に始まった標準化をめぐるこれまでの議論の結果は、以上です。とりあえず、今のところすぐに何かの活動を開始するとかいう段階ではなく、もう少し会員相互の討論を深める必要があるのではないかと思います。

この記事をお読みになった感想あるいは御意見を積極的に編集部(事務局)までお寄せ下さい。FAX でも郵便でも、または電子メール(sea@jus.junet)でも結構です。SEA のすべての活動はボトム・アップの草の根方式ですから、何か特定のテーマを取り上げて、そのための分科会を作ろうといった提案を歓迎します。

開発環境およびストレス調査報告への感想

前月号に載せた開発環境実態調査およびテクノストレス調査のレポートを読んだ感想を会員のみなさんにお聞きしたところ、次のようなレスポンスがありました。

1. 開発環境実態調査について

◆長井 修治

特に、ソフトウェア開発における問題点の項目が興味深かった。いまや世の中、総情報社会、最早コンピュータのない世界は考えられない。となると、その中核を形成するソフトウェアの開発環境に対するさまざまな問題点は、あえて大袈裟な表現をすると社会問題として認知されるべきではないかと思う。

◆金子 直良

会社の大きさと環境との関係はどうなのでしょう？。会員の中には、小企業にいて派遣形態の仕事をしている人も多いと思います（少し環境の意味がちがいますか？）。

◆西郷 正宏

読んでいて気がついたのですが、理想の環境として多くの人があげているのは「現在の仕事をいかに楽にするか」ということにすぎないのではないのでしょうか。なかには斉藤由貴や小鳥のさえずりもでてきましたが、「楽に仕事ができる環境」イコール「理想の環境」というのはちと淋しい気がしませんか？

?????????◆逸見 研一

後者について、マシン環境で特に環境を参げた人が多かったですね。トレンド的な快適主義ということですかね。

◆宮下 高弘

私も同感なのですが、1人1台の使い勝手のよい MMI と CASE ツールの完備された WS、広いスペースというのが大多数の意見のようですね。一部の大手ソフトハウスではそういった努力もされているようですが、日本の狭い事務所スペースではなかなか難しい側面もあるでしょう。

◆中村 昭雄

環境とか技法とかに関しては、人によってとらえ方が違うような設問をもっと考えるか、あるいは、もっと個々の人の問題点を出せるような回答欄を設けたらどうでしょうか？内容的には、より詳細に聞いて見ないとよくわからない部分が残っていきそうな気がします。追加のアンケー

トを考えたらどうでしょう？

◆椎熊 敏朗

(1) 世間では WS や LAN や技法/ツールの利用が広まりつつあるようですが、格差の激しさはかなりあるのでは？人の質および量（特に質）の問題はどこにでもあるようですね。(2) 比較的恵まれた環境にいる人は、自分の現状をふまえた上で、より理想的なものを求めているようで、うらやましい限りです。それに対して、私のように何も無い所にいる人間ほど、何でも欲しがるのではないのでしょうか？

◆森 麻理子

「できあがった成果物に対する品質のチェック」がきちんと行われていないということは、開発担当者として、常に気になっている点です。技法・ツールともに有効なものが発表されないかな～と思っているのですが....

P.26 の松尾さんのコメントですが私たちがアポロの研究開発部門で使ってる CASE ツール (dsee) は、「どこに～だれが～いつ～どのようにして～」という情報を、とてもよく管理してくれるので便利です。特に、プログラムの履歴の図による表示や、2つのプログラム・ソースの自動マージ機能、これはすごいなって思っているのですが....

◆船切 誠

「あたりまえ」の感想になってしまいますが、やはり「要求定義」部分が今後整備されるべきなのですね。最近では CASE として SA/SD の支援環境も出てきていますから、少しは楽になるような気もしますが（それでも人間が人間の要求を分析するのだから、楽観してはいけません）。それにしても「生産性向上ファクタ」として「開発要員の質の向上」がトップとは！ 生涯勉強を続けなきゃいけないんですね（楽しい楽しい？）。

◆野村 行憲

C 言語の使用が急増し、支援ツールが要求されて来ている。事務処理系では、COBOL が依然として強く、ツールが普及されてきている。調査がソフトハウス中心となっているのは、業界の形態か？

◆松沢 好男

全部を読んだわけではなく、言語について目を通しました。結果では、C言語の普及がいちじるしいようですが、

私のまわりでは、この言語を使っている人間は1人もいません。いまだに COBOL とアセンブラで商売しています。小さなソフトハウスですが、もう斜きかかっているのかな？

◆尾形 修一

「現状と動向」については、予想していたような傾向が出ている。しかし、問題をどのように解決すればよいのか見えていない。「理想の環境」は実に面白い。この中から企画を出せるような気がする。

◆木全 洋

社内・社外のネットワークにつながっているワークステーションのもとで、文書作成、ソフトウェア開発 (CASE ツールを用いて) をする理想像に少しでも近づきたい。

◆伊藤 洋一

開発技法について： いろんな新しい言葉や概念が出てくるが、使う人によって、その意味が違っているように思われる。

理想の環境： ドキュメントだけ直せば、関連する箇所全部変わるようになると、全部のドキュメントを1人で作っていない限り、怖くて直せなくなるのでは？

◆上田 鉄雄

やはり、みんな考えていることはそんなにかわりませんね。広い机、自由につかえる WS や PC、静かなアトリエのような部屋、FAX、留守番電話、なおかつ、WS は電話回線やネットワークにつながっていて、どこからでも自分の WS にログインして作業できればベストです。早く、そんな環境が作りたいものです。

◆折田 豊

分析のワーキンググループに参加させてもらったときは、プロトタイピングに対してマユツパ的に接していた。最近では、どんどん関心が高まって来ました。ひょっとしたら、ここ数年で一番の発見かもしれない。

◆横山 博司

多くの人が、WS があって LAN でつながっている環境を理想としているようですが、これは、現実問題にはまだ、WS あるいは EWS などあまり普及していないという事実を暗示しているのでしょうか？

実際、私の机の上にも、何の端末も乗ってはいません。あるのは、ただのワープロだけ。しかも10行の液晶表示で、遅いのなんのって、急ぎの仕事には使えません。

いやいや、愚痴はこの辺にして、「実際どれぐらいの人が、満足いく環境で過ごしていて、その環境がどのようなものなのか？」を調査したデータなんかを教えてください

ば、うれしいのですが.....

2. テクノストレス調査について

◆長井 修治

テクノストレスの外的要因として、開発環境に起因する弊害があるのではないかと。また、内的要因として、個人の精神的な脆さが目立ってきたように感じる。特に若手の男性に顕著になってきた。むしろ若い女性の方が逆にタフなのではないだろうか。オバタリアン予備軍は着実にその勢力を増強しつつある。

◆金子 直良

テクノストレスというより、労働条件の問題ではないでしょうか？ (休めないとか、残業が多いとか)

◆西郷 正宏

アンケート中心のこの調査は、厳密なテクノストレスというよりは「日頃の不満調査」と考えた方がよいのかもしれない。本人が気づかないうちに蓄積するストレスや、本人が思いもよらぬことがストレスの原因になることがあると聞きますが、そういった問題の方にむしろ興味を覚えます。「本人が自覚している不満」イコール「ストレス」というのはいかがなものでしょうか？

◆逸見 研一

私個人としては「テクノストレス」よりも、人間関係からくるストレスの方が問題ですね。むしろ、機械を相手にすることによって、人間疎外から多少とも救われるということもあるのではないのでしょうか。

◆宮下 高弘

ストレス評価の順位を見てみると、個人の力に頼った労働集約型産業の姿が浮かびます。ソフトウェア開発という作業を早く工業化(自動化)して行くことが重要だと思われれます。そう言った意味でも、ソフトウェア・エンジニアリングの進歩に期待します。

◆山城 英彦

非常に重要な問題です。私自身、転職前の会社では、テクノストレスで体がガタガタになりました(緊張状態が退社後も解けず、常に仕事のことを考え続ける状態が続きました)。結局、開発の現場を離れて、スキューバダイビングを始めるようにより、やっと、オフタイムに仕事を忘れることができるようになりました。

◆中村 昭雄

ストレスは増える一方だと思いますし、ストレスの大きな要因である納期・仕事量・仕様変更の問題等は、どんど

ん大きくなる一方ですが、ストレスなんていつてられるような現状ではないように思います。ストレスだから休むとかいえるような社会的な環境が欲しい。1人でぶつぶついつていても始まらない。精神的重荷に対する対応策は何があるのか、もう少しこうした調査を継続して欲しい。

◆椎熊 敏朗

自分たちにあるのは「テクノストレス」というより、むしろ「テクノレスストレス」ではないかというのが実感です。外部からの情報と周囲の環境とのけたはずれなギャップ。意欲的な人間ほど企業の論理（金儲け、組織への服従）に対して抑圧感をもち、数人分の仕事を押しつけられ、不当な長時間労働の毎日を送っている。会社や職場によってそれぞれ事情が違いますが、このように感じている人は結構多いのではないのでしょうか？

◆森 麻理子

物理的な職場環境よりは、創造的な仕事に従事できるか？技術者としてスキルアップできるか？職場に楽しいおもちゃ（ハードウェア、ソフトウェア）がたくさんあり、それで遊べる余裕があるか？というようなことで、ストレス値は変わってくると思います。私は現在、あまりストレスは感じていません（ということは、もしかしたら幸せな環境にいるのかも知れませんね）。

◆野村 行憲

ストレスは一般的なもので、「テクノ」と分類するのは不自然だし、あまり興味がない。むしろ、自分はストレスを感じていない。

◆松沢 好男

「コンピュータの論理に自分を適応させようとするところからおこる人格変容」まさにこの通りです。たてまえとして、残業量や報酬を理由にしていますが、本当はもっと些細なことのような気がします。

◆尾形 修一

職場に同じような性格、行動パターンの人が集まり、皆ストレスの解消の仕方がヘタである。リーダーシップを持った人間が必要だし、リクリエーションの機会がもっと増えないと、長期的に生産性やモラルが低下してしまう。指導をする専門家が必要な時代だ。

◆木全 洋

ある意味で、みんな悩んでいるので安心をした。私自身のストレス発散法は、リーダ同志のコミュニケーションです。

◆伊藤 洋一

生産性の向上とテクノストレスの低下をとり違えないようにしたい。実際にソフトウェア開発を担当している者にとっては、とにかく楽しく仕事ができれば、それでよいのだと思う。生産性を上げるための努力、または上がったことによって、仕事の楽しみの度合いが下がるとしたら、生産性は放棄しよう。

◆上田 鉄雄

2～3年前には、実際、仕様と納期と人間関係でストレスをかなり感じたことはあるが、現在はあまり感じていない。やはり、むりな工程や仕様が与えられた場合にストレスが多くなると思う。

◆折田 豊

みんな疲れているんですね。私は、コンディションが絶不調の時点で、このアンケートに解答しました。あれから数ヶ月。最近では、明るく考えることが一番のストレス解消法だと思っています。

◆横山 博司

何といっても、「仕事に追われー、この頃やっーと、ゆとりができたー」と歌にもあるように、ゆとり次第じゃないのでしょうか。つまり、(1) 納期、(2) 技術のある人材、(3) 開発環境(マシン、作業場所の両方を含めて)、(4) 理解ある管理者、(5) 理解ある顧客などなど、すべてにゆとりがあれば、悪玉ストレスなど溜まらないのではないのでしょうか？

シリコンバレーを楽しむために

— その1 —

大神原 薫

San Jose, California

0. はじめに

約 1700人の SEA 会員の方々の中には、近い将来、シリコンバレーを訪れることになる方は、きっと少なくないことでしょう。本稿はそういう方のために、特にウィークエンドとアフターファイブに役立てていただけるようにまとめられた「スタックウェア」です。

本稿で紹介する内容は、基本的には著者の経験にもとづくものです。シリコンバレー滞在わずか1年ほどではありますが、この間に筆者が見聞・利用・購入・飲食した事物・場所・店舗・施設について、なるべく肩が凝らないようにまとめてみたつもりです。

さし当ってシリコンバレーには用はなさそうだという方にも楽しく読んでいただけるかどうか、筆者の技量では多少の不安が残りますが、少なくとも本稿で取り上げた情報の正確さと新鮮さについては、保証できると思います。なお道順の説明は、San Jose 空港付近からフリーウェイを利用することを前提にしてあります。また価格や営業時間などは変動することが多いのでご承知おきください。

恐らくSEA会員の方の中には、筆者などよりシリコンバレーに詳しい方もおられることだろうと思います。そのような方は、どうかぜひ、御存知の穴場をお教え下さいますように。

1. 書店

さて、そこでまず手始めに書店へと御案内することになります。なぜ最初が書店かといいますと、実は、活字中毒の筆者がシリコンバレーに着いてから最初に探して歩いたのが書店だったからです。その時探していたのはごく普通の書店でしたが、本稿では、むしろ専門書や日本の本が買える書店を中心に紹介することにします。

なお、News Week や Cosmopolitan といった雑誌、ベストセラーのペーパーバック、TVガイドなどは、ドラッグストアやスーパーマーケットで買えることを付け加えておきます。住宅地には必ず大きなスーパーマーケットが

ありますし、品揃えもかなり豊富ですから大変便利です。

1-1. Computer Literacy

2590 North First St. , San Jose

(408)435-1118

営業時間 月～金 9:00～21:00

土・日 10:00～18:00

San Jose空港からだ、フリーウェイを使う必要はありません。路面電車の走る N.1st St.を、フリーウェイ101の下をくぐってから、北へ約1マイルほど行ったところ。右手に McDonnell Douglas のビルが見えたとすぐに Trimble Rd. と交差しますので、これを右折してすぐ右側の McDonnell Douglas のビルの1階にあります。

書店としては実にゆったりとした店内にコンピュータ関係の書籍ばかりが、AI・UNIX・Graphics・Mac・IBM などというような項目に分類されて並べられています。雑誌類も豊富で、かなりマイナーな雑誌も手に入るようです。

ここは、メールオーダーやテレホンオーダーも受け付けてくれ、ストックがあれば翌日には発送するという、アメリカにしては珍しく迅速なサービスがあります。

どこの書店でもそうですが、日本と同様に本は定価で販売されています。値引交渉を試みたことはありませんが、恐らく無効でしょう。ただ日本と違うのは、時々、赤札のついた安売りの本を見かけることです。これは半額くらいになっているのでお買得です。

最近買った本の中では、The Binary Bible[1] と The Zen of Programming がなかなか傑作でした。前者は聖書のパロディで、後者は禅の本です。当然のことながら真面目な専門書ではありませんが、強い Healing 効果があります。それぞれ \$14.95 と \$7.95 でした。たぶん翻訳は出ていないと思います。

次の3冊は翻訳も出ていて、値段もわかっていますので参考に掲載しておきます(ただし値段は消費税導入前のものです)。

- (1) UNIX SHELL Programming
S.G.Kochan & P.H.Wood \$24.95
[訳] UNIX SHELL プログラミング
玄光男 & 荒実 (HBJ出版局) ¥3500
- (2) Advanced UNIX Programming
Marc J. Rochkind \$29.95
[訳] UNIXシステムコールプログラミング
福崎俊博 (ASCII) ¥3500
- (3) The UNIX Programming Environment
B.W.Kernighan & R.Pike \$24.95
[訳] UNIXプログラミング環境
石田晴久 (監訳) (ASCII) ¥3800

(2) と (3) の値段は誤りではありません。なぜ原書と翻訳で値段の逆転現象が起こるのか、出版社に聞いてみたいような気がします。この3冊で平均すれば、1ドルが136円くらいのレートになりますが、全般的に物価の安いアメリカにあっては、この種の専門書は相対的に高価であるといえるでしょう。

この店は、上記の San Jose 店の他にも Santa Clara と Sunnyvale に支店があります。Santa Clara 店は Great America という遊園地の近くで、Double Tree Inn の隣りの Techmart というビルの1階にあります。Sunnyvale 店の方はまだ行ったことがないのですが San Jose 店が最も大きいようです。

Santa Clara 店

5201 Great America Pkwy.

(408)562-5799

営業時間 月～金 10:00～18:00

土・日 休み

Sunnyvale 店

520 Lawrence Expwy.

(408)730-9955

営業時間 月～金 9:00～21:00

土・日 10:00～18:00

1-2. Stanford University Bookstore

Stanford University 内

(415)329-1217

Stanford 大学の売店です。San Jose からだとフリーウェイ101を使うのが普通ですが、筆者はあえてフリーウェイ280をお勧めします。少々遠まわりにはなりますが、途中の Los Altos Hills のあたりの丘の景色が大変美しく、

ちょっとしたドライブが楽しめるからです。特に2～3月ごろの新緑の頃がきれいです。

San Jose 空港からフリーウェイ880南行きに入り、フリーウェイ280北行き (San Francisco 方面) に乗ります。交通量にもよりますが約20分ほどでStanford 大学への案内板が見えます。後は案内板の指示に従って行けば迷うことはないでしょう。

大学内の売店ですから、コンピュータ関係に限らず、工学、医学、教育学、芸術などの各種の専門書が豊富にあります。この売店には、書籍ばかりでなく文房具や衣料なども置いてあって、たとえば校名入りのTシャツ(\$10～15)などはおみやげにも良いようです。子供用も含めてサイズも豊富にそろっています。

Stanford 大学では、まず案内所で地図をもらい、巡回ツアーに参加して、カフェテリアで食事、Bookstore でショッピング、一般に開放されたテニスコートやゴルフ場で汗を流すというのが、正統派の楽しみ方です。

1-3. Kinokuniya

Saratoga Av. San Jose

(408)252-1300

営業時間 年中無休 9:00～20:00

San Jose には、日本の食品や日用品を売っているスーパーマーケットがいくつかありますが、その中で、今一番新しい Yaohan の中に、この Kinokuniya があります。

San Jose 空港付近からだと、まずフリーウェイ880を南に行き、フリーウェイ280とのインターチェンジで280北行 (San Francisco 方面) に入ります。そこから約2マイルほど行ったところにある最初の出口が Saratoga Av. で、これを南行 (Saratoga 方面) に出ます。ランプを上り、280をまたぎ越えると間もなく Moorpark Av. と交差しますが、この交差点を過ぎると右側に Yaohan があります。

恐らくシリコンバレーで日本の本が手に入るの、ここだけでしょう。それほど広くはありませんが、週刊誌・月刊雑誌・文庫・コミックなどがひと通り揃っていて、新刊のハードカバーなどはけっこう入って来ているようです。日本での発売よりも遅れるのは仕方ないところですが、つい最近 (7月下旬) 買った Mac+ CYBER が2月号だったのは驚きでした。

価格はかなり高価です。2370円 (本体2301円) の「入門マッキントッシュ」は \$28.75 でした。490円 (本体476円) のトランジスタ技術は \$6.20 です。平均すると、日本での定価を1ドル80円で換算したくらいの値段がついてい

るようです。

なお、文房具、折紙、団扇なども売っていますので、ホームパーティに招かれた際のちょっとした土産などに便利です。また、朝日・読売・日経といった新聞（国際版とか衛星版と呼ばれるもの）も手に入ります。\$2~3くらいです。

1-4. 普通の書店

日本では、商店街を歩けば必ず1軒や2軒は書店がありますが、アメリカで、このような街の書店に相当するのが、ショッピングモールの中の書店でしょう。いくつかのショッピングモールについては別に紹介しますので、そちらを参照して下さい。モールの営業時間は、月~金が10:00~21:00、土日が11:00~18:00くらいです。

初めてシリコンバレーにおいでになる方は、まずこうした書店で San Jose の地図を買うことをお勧めします。いわゆるストリートマップというもので、ストリートアドレスを使用しているアメリカにあつては、大変重宝なものです。

"San Jose"とタイトルの付いた折り畳みの地図なら、Palo Altoを除いてシリコンバレーをほぼカバーしていて、価格は\$2くらいです。役所・学校・公共機関・観光名所などもわかりやすく表示されていて便利です。多色刷りの物が見やすく良いでしょう。他にもビデオソフト（100分くらいの映画で\$25~30くらい）やカセットブックなどもあります。

年末のクリスマスセールの際なら、カレンダーがお勧めです。Murphy's Law の日めくりなどは、含蓄とユーモア感覚が一年中楽しめます。カレンダーは\$10くらいのもが多いようです。

***** ちょっと休憩 *****

書き始めるまでは、こんなに大変なことだとは思っていませんでした。新鮮な材料は手間さえかければ手に入りますが、これをシリコンバレー風に味付けするのは並大抵のことではないようです。少々先が思いやられますが、次はエレクトロニクスショップを御案内する予定です。さらに、次回以降には、ショッピングセンターやレストラン、ちょっとした観光名所なども紹介して行きたいと思っていますのでお楽しみに。

注記 [1] この本の著者について次のようなコメントが書かれていました。無断引用になりますが、おもしろいので

紹介します。

— Jeffrey Armstrong は、世界初のコンピュータ教である C.H.I.P.(the Church of Heuristic Information Processing)の創始者である。ワープロで仕事をしていたある夜のこと、屋根のバラボランテナに稲妻が走り、衝撃で気を失った。目を覚ました時、スクリーンには、The Binary Bible の執筆命令と共に、18ボ・タイムズローマン体の "Keyboard Prayer" が表れていた。こうして Saint Silicon として生まれ変わった彼は、仕事を辞め、Santa Cruz の山中の洞窟にこもって、G.O.D.(Giver of Data)の啓示に従って The Binary Bible を書き始めた。

【編集部から補足】 シリコンバレーの書店としては、Palo Alto の Stanford 大学前、ダウンタウンの University Av. にある Stacey's をぜひ追加しておきたい。コンピュータ関係の本は大学の Bookstore より揃っていると、UC Berkeley のある先生がいていた。なお、この店は San Francisco の下町 (Market St.) にもあるが、こちらは技術書より一般書のほうが多い。

2. エレクトロニクスショップ

さて、書店に続いて、次はシリコンバレーのエレクトロニクスショップへと御案内しましょう。この種の店は実に多く、筆者の知らない優良店も数多くあるはずですので、手取り早く探すには電話帳を活用するのがよいでしょう。

職業別電話帳がイエローページ、アルファベット順電話帳がホワイトページと呼ばれていることを、御存知の方は多いと思います。これらの電話帳には所在地も掲載されていますので、ストリートマップを参照すれば、およその場所がわかります。

番地は道路に沿って単調に増加すること（逆方向に進む時は当然減少します）、道の右側が偶数で左側が奇数であること（逆方向に進む時は当然左右が逆になります）を知っていれば、割と容易に目的地にたどり着くことができます。

公共交通機関はあまり期待できませんので、誰かに連れて行ってもらるか、あるいはレンタカーを利用することになるでしょう。右側通行には割と簡単に順応できるようですので、車を使って積極的に動きますとよいと思います。

一口にエレクトロニクスショップといっても、取扱製品によって、パーツショップ、コンピュータショップ、ソフ

トウェアショップ、そして普通の電気店と、4つに大別できるようです。

パーツショップなどは、そういう趣味のある方や、買う物が具体的に決まっている方でなければ、あまりおもしろくないかも知れません。また、全般的な傾向として、詳しい商品知識を持った店員は少ないようです。これは何もエレクトロニクスショップに限ったことではありませんので、買物の時には、自分の欲しい物のスペックをかなり正確に知っておく必要があります。

なお、エレクトロニクスショップは、他にもたくさんありますので、最寄の店を捜すような場合には、イエローページを利用するとよいでしょう。パーツショップなどは Electronic Equipment & Supplies - Dealers という項目に出ていますし、また、コンピュータショップとソフトウェアショップは、それぞれ Computers - Dealers 及び Computers - Software & Services という項目に載っています。

2-1. Holtek Electronics

1062 Linda Vista Av., Mountain View

(408)744-1333

営業時間 月～金 7:30～19:00
土 9:00～17:00
日 休み

San Joseからフリーウェイ101を北へ向かうと、独立記念日の航空ショーで有名な Moffett 基地が右手に見えてきます。これを過ぎて間もなくの Shoreline Blvd (旧名 Stierlin Rd.) で、フリーウェイからランプを上がって Shoreline 南行に入ります。101をまたいで最初の交差点 (Terra Bella Av.) を左折すると、すぐ Linda Vista Av. と交差しますので、これも左折し、100mほど行った左側にこの Holtek があります。

パーツショップというよりは、ジャンクショップといった方が適切でしょう。一見倉庫風のかなり広い店内には、スイッチングレギュレータや、古コンピュータ (Intel の MDS が転がっていたりする)、各種モータ、真空管、キーボード、用途不明の PC 基板などが、山と積まれています。

変わったところでは、GaAs FET が1個 \$9.95、68030-25MHZ が \$299、シリコンウェハ (径3インチくらい) が1枚 \$1.50 などというものも置いてあります。入口付近にアンティークラジオのコレクションが置かれていて、マニアの方には垂涎ものなのかもしれませんが、残念ながら

売物ではありません。

全体的な価格は、次に述べる Halted より少し高めでしょうか。

2-2. Halted Specialties

3500 Ryder St. Santa Clara

(408)732-1573

営業時間 月～金 10:00～18:00
土 9:00～17:00
日 休み

San Jose からフリーウェイ101を北へ6・7マイル行くと、Great America (遊園地) を過ぎて間もなく Lawrence Expwy への出口があります。ランプを上げて Lawrence 南行きに入ってから、およそ1マイルで Central Expwy の下をくぐりますので、その直後の Enochs St. へと右折し、右カーブを出るとすぐに Central Expwy 東行きへと右折します。Lawrence をまたぐとすぐ Ryder St. がありますので、これを右折したら、すぐ左側にこの Halted があります。

ここもパーツショップですが、前述の Haltek よりは新品が多いようです。この店を紹介してくれた某ベンチャー企業のエンジニアは「もし望みのものが置いてあれば、それはきっとこの店よりも安いだろう」といっていました。店員の知識はやはりあまり期待できませんが、筆者が特殊な IC を捜していた時には、その IC メーカーの特約店を調べてくれたりして、けっこう親切でした。

2-3. Quement

1000 South Bascom Av. San Jose

(408)998-5900

営業時間 月～土 9:00～21:00
日 休み

San Jose 空港付近からだとフリーウェイ880を南へ進み、Stevens Creek Blvd の出口を、東行きへと出ます。ランプを上がり、880をまたいで300mほどで Bascom Av. と交差しますので、これを右折し、約1マイルほど行くと左側に Quement と書いたかなり大きな看板が見えます。

一応パーツショップですが、テレビやステレオなども置いてあるので、電気店ともいえるでしょう。ソフトや OS の解説書も、数は多くはありませんが置いてあります。価格は普通か少し安いくらいで、セール時にはかなり安くなるようです。

2-4. Fry's Electronics

541 Lakeside Dr., Sunnyvale

(408)737-0288

営業時間 月～金 8:00～20:00

土・日 9:00～18:00

Haltedと同じく、フリーウェイ101から Lawrence 南行きへと入ります。101をまたいで最初の交差点(Oakmead Pkwy.)を左折しますので、早めに中央レーンに寄っておくとよいでしょう。Lawrence から Oakmead へと左折すると、間もなく右側に看板が出ているのでわかります。または、少し先の Lakeside Dr. との交差点で右折した右側にも入口があります。

IC のストックが豊富で、店内中央部にあるオーダデスクで型番をいけば出してくれます。また在庫がない場合には気軽に取り寄せてくれます。ここは一応パーツショップですが、パソコンや周辺装置も多く、しかもソフトの品揃えも豊富で、さらにテレビ・ビデオなどの家電品もあります。

驚くべきことにジャンクフード(スナック菓子類)やソフトドリンク、雑誌、薬なども売っていて、ほとんどスーパーマーケットの雰囲気です。

某エンジニアは次のようにいっています。「自分たちが何を売っているかがわからないようで、あるものは高いがあるものは極端に安いということがある。何を買いたいかということと、それが他店でいくらかということを知っていれば、ここは悪い店じゃない。」

というわけですので、全体的に価格は並です。無印良品風の簡素なビニール袋に入った 5.25インチFD(2HD)が25枚で \$17でした。

2-5. Data Source

4080 Stevens Creek Blvd. San Jose

(408)296-6400

営業時間 月～金 10:00～17:00

土・日 休み

フリーウェイ808からフリーウェイ280に入り Saratoga Av. を出るところまでは、Kinokuniya への道順と同じです。違うのは、Kinokuniya へは Saratoga Av. を南へ行ったのに対し、この Data Source は北へ行くということです。280から Saratoga Av. 北行きに入ったら早めに中央レーンに寄り、100mほど先の Kiely Blvd. で左折します。この Kiely Blvd. はすぐに大きく右へカーブし、やがて Stevens Creek Blvd. と交差しますのでここを右折します。Nissanの前を通り過ぎたら右側に、Oshman's というスポ

ーツ洋品店と Circuit City という電気店(後述)に挟まれて、この Data Source があります。

この種のコンピュータショップは、一般的に営業時間が短いようです。企業相手の取引の方が一般客相手よりも多いからでしょう。従って、店の広さの割に客が少なく、じっくり見たいという人などには、むしろ好都合だと思います。

パソコンや周辺機器ばかりでなく、ソフトウェアや書籍などもあります。価格はやや高めですが、ビジネス関係のソフトウェアは、後述のソフトウェアショップより豊富です。

2-6. Software Etc.

Valley Fair Shopping Center 内

(408)246-0802

営業時間 月～金 10:00～21:00

土 10:00～21:00

日 11:00～18:00

Valco Fashion Park 内

(電話番号: 不明)

営業時間 月～金 10:00～21:00

土 10:00～19:00

日 11:00～18:00

Valley Fair と Valco Fashion Park というのは、いずれも大きなショッピングモールです。Valley Fairの方は、フリーウェイ880を Stevens Creek Blvd. 西行きへと出たところで、右側に広い駐車場と大きなビルが見えるのすぐにわかります。

一方、Valco Fashion Parkの方は、フリーウェイ880からフリーウェイ280北行(San Francisco 方面)に乗り(ここまでは Kinokuniya への道順と同じ)、3つ目の出口で Wolfe Rd. の南行きへと出ると、280をまちですぐに、正面に見えて来ます。道をまたいで両側にモールの建物が広がっていて、駐車場はどちら側にもあります。

いずれもかなり大きなショッピングモールですが、中に入れば案内板がありますので、店の位置はすぐにわかります。時間があれば端から端まで歩いてみるとよいでしょう。

この Software Etc.では、ゲームを中心に各種のパッケージソフトが、対応するコンピュータごとに分類されて並べられています。その一画には Nintendo(ファミコンのアメリカ版はこう呼ばれている)のコーナーもあり、平均 \$50 くらいで売られています。日本ほどソフトは豊富ではありませんがけっこう人気はあるようです。

他のパッケージソフトと違って Nintendo のソフトは、おもちゃ屋や Warehouse というチェーンのビデオショップでも買うことができ、価格も10%ほど安いようです。ただし、日本のファミコンとの互換性はありません。カセットの外形がまったく違っているためです。一説には、ハードウェアそのものが違うともいわれていますが、これは未確認情報です（SEA の会員に任天堂の方はおられませんか?）。

店内はあまり広くはありませんが、明るくて、商品もよく整理されています。赤札のついた安売り品は半額くらいですが、話題の最新ソフトというわけではなさそうです。店員のアドバイスは期待できないので、対応機種や必要なハードウェア構成などについては、十分に調査・検討しておいた方がよいでしょう。

また、Valco Fashion Park の中には、Electronics Boutique というソフトウェアショップもあります。店内の様子、価格、品揃えなど、ほとんどが同じです。一例ですが、MS Window/386 が \$100 くらいで売られていました。全体的にパッケージソフトの価格は日本よりずっと安いようです。

2-7. Circuit City

4080 Stevens Creek Blvd., San Jose
(408)296-5522

営業時間 月～金 11:00～21:00
土 10:00～19:00
日 11:00～18:00

チェーン店なのであちこちにあるようですが、San Jose では、前述の Data Source の隣にあります。大手の家電品のデパートといったところで、価格は並か、やや高めです。

ここでは、ちょっと大きな物を買う時には、まず「カウンセラー」と呼ばれている係員をつかまえて、買いたい物を告げなければなりません。係員はそれを売場の端末から入力し（この時、住所氏名を聞かれる）、在庫があって無事登録されるとオーダー番号を教えてください。この番号を持ってレジへ行き、支払いをすませてレシートをもらった後、今度はこのレシートを持ってピックアップカウンタへ行き、品物を受け取るというシステムになっています。

実はこのコンピュータシステムはなかなかのもので、乾電池を買うにも住所・氏名を聞かれるし、10インチ幅の巨大なレシートがプリントアウトされるし、しかもパーソナルチェックの ID には、カリフォルニアの運転免許証しか使えないし（パスポート番号は桁数が違うので入力できな

いらしい）、しかもクレジットカードは AMEX が使えないという始末です。

しかしながら、客観的に見れば、品揃えは豊富で新製品も多く、係員の商品知識も他の店ほどひどくはないので、高価な物を買う場合の情報収集の手始めにするのによいでしょう。日本の一流メーカーのヘッドホンステレオが \$50 くらいからあって、見るたびに買ってしまいそうになります。ビデオデッキの最多販売価格帯が \$300～400 といったところでしょうか。

2-8. Best Products

550 West Hamilton Av., Campbell
(408)374-6630

営業時間 月～金 10:00～21:00
土 10:00～18:00
日 11:00～18:00

カタログ販売の店で、あらゆる物を扱っていて、その中にエレクトロニクス製品が含まれているのですが、あえてここで取り上げたのは価格が十分安いからです。\$3 くらいで売っているカタログを買って、それを見ながら電話で注文することができますが、実際に出かけて行く方がよいでしょう。なぜなら、常に何らかのセールをやっていて、赤札のついたセール対象品は間違いなく他店より安いからです。

場所はいくつかあるようですが、筆者が知っているのは Campbell 店です。フリーウェイ 880 を南へ下り、フリーウェイ 280 とのインターチェンジを過ぎて、最初の出口である Hamilton Av. を西行きへと出ます。約 1.5 マイルほど行くと San Tomas Expwy. と交差しますが、Best Products は、その交差点の手前左側にあります。

この店は、オーダーフォームに品番、品名、数量などを記入し、オーダーデスクでインプットしてもらった後、ピックアップカウンタでお金を払って、品物を受け取るというシステムになっています。カタログ販売が基本なので、新製品は期待できませんが、宝石・貴金属・銃・ギフト用品・旅行鞆・おもちゃ・スポーツ用品など、取扱製品は極めて多様でかつ安価です。

追記

場所は知っているけれどもまだ入ったことはないという店が 2～3 ありますので、ここに挙げておきます。

Computer Center

597 E. Calaveras Blvd., Milpitas

(408)945-2985

営業時間 月～土 10:00～18:00

フリーウェイ 880 を北へ向かうと、5～6マイルで州道 237号線(Calaveras Blvd.)と交差しますので、東行きに入ります。Southern Pacific 鉄道をまたいでいる陸橋を過ぎると、左側に Milpitas Town Center が見えてきます。Computer Center はこの Milpitas Town Center の中の、映画館の向いにあります。

Businessland

3610 Stevens Creek Blvd., San Jose

(408)554-9292

あの NeXT の一般市場向け販売店です。フリーウェイ 880 を Stevens Creek Blvd. で降りて、Valley Fair Shopping Center を右に見ながら、西へ約 1.5マイルほど行くと San Tomas Expwy. と交差します。この交差点の手前左側に、この Businessland があります。営業時間は不明ですが、ウィークデーの 10:00～17:00 ならたぶん間違いなく開いています。

The Mac Shop

833 W.El Camino Real, Sunnyvale

(408)736-6227

フリーウェイ 101 を北へ 5・6マイル行くと Mathilda Av. と交差しますので、南行きへと入ります。約 2マイルで El Camino Real と交差しますからこれを右折、裁判所の前を過ぎ、Pastoria Av. を過ぎると右手にこの The Mac Shop があります。Mac のソフトウェアの専門店、日曜休み、夕方 18:00 までだそうです。

次回予告

今回はショッピングセンタや、いくつかの特徴的な専門店を紹介する予定にしています。ご希望があれば SEAMAIL 編集部までお寄せください。

在庫案内

事務局に、過去のシンポジウムの論文集やワークショップ・レポートの在庫があります。御希望の方は、FAX または郵便で、送付先を明記の上、お申込みください。折り返し、請求書を同封のうえ、書籍小包でお送りします。代金は、品物が着いた後、銀行振込でお支払をお願いします。

Software Symposium '87 論文集

送料込み 3000円

Software Symposium '88 論文集

送料込み 3000円

Software Symposium '89 論文集

送料込み 3000円

第1回環境ワークショップ報告書(1986冬,長岡)

送料込み 2000円

第2回環境ワークショップ報告書(1987冬,長岡)

送料込み 2000円

第3回環境ワークショップ報告書(1988冬,長野)

送料込み 2000円

第1回教育ワークショップ報告書(1987秋,八ヶ岳)

送料込み 2000円

第2回教育ワークショップ報告書(1988夏,天童)

(SEAMAIL Vol. 3, No. 11-12) 送料込み 1000円

第4回若手の会報告書(1986夏,盛岡)

送料込み 2000円

第5回若手の会報告書(1987夏,盛岡)

送料込み 2000円

第6回若手の会報告書(1988夏,八ヶ岳)

(SEAMAIL Vol. 3, No. 9) 送料込み 1000円

第2回 日中ソフトウェアシンポジウム拾遺

0. はじめに

去年の10月に杭州で行われた第2回日中シンポジウムの報告は、すでに Vol.4, No.1 に掲載済みです。そして、ほんとうならこの10月に大阪で開催の予定だった第3回シンポジウムは、天安門で起こった不幸な出来事のあおりを受けて、来年まで延期になりました。時期および場所は未定ですが、6月のソフトウェア・シンポジウム（京都）と連動させてはどうかという線で、検討されています。

ところで、去年参加メンバーの方々に毎日書いていただいたメモが、まだたくさん残っています。そこで、1年前の旅行メモのなかからいくつかをピックアップして、天安門事件以前の中国の印象をまとめてみることにしました。

この楽しい旅行記からは、6月のあの悲劇の前兆など、ほとんど読み取ることはできません。ただ、近代化への人々の激しい意欲が感じられるだけです。今後も、この巨大な隣国は、左右に大きく揺れながら、開放と近代化の路線を突き進んで行くのでしょうか、そのうねりの中で、おそらくはさまざまな政治の波に翻弄されるであろう中国ソフトウェア技術者・研究者の方々の幸運を祈らずにはいられません。

1. 成田からの機中で (10月2日)

林 香 (SRA)

[TCAT~成田] バスの中での会話:

林: 昨年、中国へ行った人の話も色々ですが、本当はどうなのでしょう?

中野: 岸田、熊、杉田はもともと何でもOKだから“?”だし、中島さんの話も少しオーバーだから、まあ行ってみないとわかりませんネ。

見知った顔ばかりなので、技術交流部会へ出掛けるかのように思えるが、見知らぬ地への旅立ちには、やはりワクワクする。

久保 宏志 (富士通)

中国に行くのは初めて。中国民航に乗るのも初めて。再訪したい気持ちになるかどうかは、滞在中の見聞と体験次第だが、中国民航には、やむをえない場合を除いてもう乗らない。機体の整備は悪いし、機内サービスも悪い。これほど無愛想なスチュワーデスを乗せている航空会社は今どこきそうあるまい。先々週利用したマレーシア航空での快適な旅とは雲泥の差である。

熊谷 章 (PFU)

昨年の感動の余韻を残しながら、機中の人となる。昨年は、身体が欲するままに、心が動くままに行動し、多くの感動を得た。正にアジアの魂とそれを引き継いだ細胞が長い眠りから目覚めた旅であった。今年は、その感動を受けて、少しゆったりと細胞レベルではなくて、心や気のレベルでの感動を味わいたい。

斎藤 信男 (慶応大学)

杉田さんのラジオで、ソウル五輪のマラソンの放送を聞きながら、中国民航の美しいスチュワーデスのサービスで昼食をとった。アジアの空は国際的である。NHKの音はどんどん小さくなり、韓国語の漫才と混線してしまう。アジアは一つなのだ実感する。何年後には、北京オリンピックも実現するだろう。マルチバイトの文字コードを使う日中朝3国は、本来もっと協力しあうべきだ。

2. 上海到着 (10月2日)

片山 卓也 (東京工業大学)

みなさんより先に、北京から南京を廻り、南京発上海行きの直通特急で、12時15分頃、上海駅に着きました。プラットホームに降りたとたん、5人くらいの男がやってきて、荷物を取り、タクシーに30円で乗れと交渉してきました。荷物は持ってもらったまま、交渉の方は分からないふりをしてタクシー乗場に行くと、美人のタクシー案内係がいて、タクシーらしいものに乗り込みましたが、驚いたことに彼女も一緒に乗ってきました。車内で料金の交渉がまた始まり、結局、20元を払われました。これまでの都市ではこのようなことはなかったので、初めは少しびっくりしましたが、改めて考えると、いかにも上海らしい経験をしたと思っています。

下田 博次 (フリージャーナリスト)

ソウルでは、人々がせかせかと歩き、車は、かつての神風タクシーのように走り回っていた。あのエネルギーは、日本に近い。それに比べて、中国の人々は、ゆったり、伸び伸びとして、時の流れが豊かに感じられる。大声で話し、食べたいように食べ、生活を楽しんでいるような気がする。祝日に着いたせいかと思うが、やはり、生活のベースが基本的に違うのだ。

エアポートからホテルまで、プラタナスの街路樹が続く。高いビルが林立するより、並木の立派な方が、大國を感じ

させるから不思議だ。

メインストリートの人波に混ざって、目がどうしても女性の方にむかう。予想と違ったのはファッションで、明らかに流行を追う気配が出ている。場違いなくらいファッションブルな男女を見かけた。結構、上海の人は、おしゃれなんだ。遊び人だと思う。しかし、総じて、男性の服装はおかまいなしの風あり。

オールナイトの映画館があって若い人たちが群がっているのは、どの国も同じとして、街のあちこちでは老人もまじって、カードのようなゲームに興じている。商業娯楽の種類こそ少ないものの、人々はショーウィンドまで熱心に眺め、何か楽しげに語っている。中国人は、マイペースで生活を楽しくする工夫をする楽天的天性を持っているのではないか。

中野 秀男 (大阪大学)

3連休の中日とかで、人はいつもより少ないらしい。それでも、隣の自転車と喧嘩したり、警笛を鳴らしながら走る。街並が全然違う。

無事、ホテルに到着。でも、なかなかチェックインできず。「きっとこれからもこうだ」といいきかせる。斎藤先生と同室。四方山話をしている内に7時のディナー。上海ビールがたくさん出た。お腹がふくれないので（ふくれていても一緒だが）、街へくりだす。

まず、名物の小籠包を食べにいく。出てきたセイロの竹の腐っているのに閉口したが、味はマアママ。隣で岸田さんが、「おいしい、おいしい」と言っているが、この人と杉田さんの「おいしい」は要注意。でも人並に食べてしまう。次は鶏肉（白斬鶏）。これはおいしかった。骨付なのには少し参ったが、当地ではこれが普通なのだから仕方がない。トロリーと自転車と人と（順番が逆かな）の上海の道。平日はもっと凄いそうだが、おいおいわかるだろう。

ホテルに帰ってコーヒーを飲む。ホテルと街中とのこのギャップ。静かに寝る予定が、何人かと飲むことになってしまう。シーバスリーガルのストレート。水も氷も駄目だから、仕方がない。

まずは、押さえ気味の一日目のスタートでした。

3. 上海から杭州へ (10月 3日)

野村 敏次 (日本電子計算)

汽車のキップがとれず、急拠飛行機になった関係で、早く杭州に着き、1日観光となる。空港からバスで玉泉へ。その後、靈隱寺へ。すごい人である。後で分かったが、今日は国慶節の振替休日との事。仏像が皆、非常に人間的な

顔とスタイルであるのに驚く。日本は、仏教を美化し、整えすぎたのではないか？（それとも、奈良平安時代のお寺はこのように原色でキラキラしていたのだろうか？）線香に火をつけたまま（正しくは燃やしたまま）、多くの人が参拝している。

12時近くにホテル（杭州華僑飯店）へ。ホテルの前に、赤地に白の横断幕。第2回日中軟件技術検討会とある。昼食後、舟を借り切って西湖の島めぐり。美しい街である。湖上から眺める杭州は、とても中国とは思えない。

夜、張先生と散歩した時に聞いた話では、今年8月8日の台風で、街の樹が2万本倒れ、停電と断水になったとのこと。いたるところのプラタナスに添え木がしてある理由がこれで分かった。

林 香

朝早く起きたので眠い。これから杭州までのフライト。7:45 発 8:25 着の予定。昨夜は、ホテル（国際飯店）にて夕食。上海ビールがなかなかの味（のどごしにベンジンのような香り有）。

飛行機からの眺めは、この地方が非常に豊かであることを思わせる（水と緑が深い）。地上の気温はTシャツ。玉泉に大魚と桂花有。杭州は、湖のほとりの美しい街。が、人と自転車の多さは変わらず。中国側の案内で、西湖の島めぐり。歓迎のされすぎにとまどう。杭州華僑飯店に宿。料理、特にスープがうまい！

片山 禎昭 (日本システム)

靈隱寺の仏像群、特に本堂の裏側の観音様をとりまく群像の巨大なレリーフ(?)は、一種のショックでした。上海の街で出合った「無数」の人民の先祖たちのパワーを、古代皇帝の権力によりベクトルを併せて駆使すると、このようなハードウェアとソフトウェアができるわけでしょう。その子孫のベクトルが、何かで揃ったら一体どうなるのでしょうか？

宮本 勲 (ハワイ大学)

ホテルの部屋で、テレビをつけました。何か判る番組はないかとチャンネルを回しました。結局、1チャンネルしか使っていないことがわかりました。まったく理解できない言葉の洪水の中で、次のようなことを考えました。

テレビの普及ということ、もしくは、テレビ(という技術)を使いこなすということは、単にテレビ受像機を作り、それを各家庭が持てるようにするだけではなく、空いているチャンネルをもっと利用することであり、番組を向上させることでもあります。マイクロフォンの使い方、カメラア

ングル、照明等も気になりました。テレビ（という技術）をよりよく利用するには、よいテレビセットを作り、広め、放送局も増やし、番組も改善し、人々と密着した存在にさせる事が必要でしょう。

テレビにおける「ソフトウェア」の事情は、コンピュータにおけるソフトウェアの現在の状況をよく表しているような気がしました。この国はこれから発展する国だ、前途に幸あれ！と念じつつ、テレビを消し目を閉じました。

4. シンポジウム第1日 (10月4日)

杉田 義明 (SRA)

シンポジウムの全体会場は、ゆったり使えば20人位しか入らない部屋に、イスだけをぎっしり詰めて、70人近くを押し込み、まるで通勤ラッシュのよう。あまりよいコンファレンス・ルームがないのであろう。日本での一昔前の事情と同じ。

楊教授のキーノート・スピーチは、ソフトウェア工学研究の状況や技術レベルがよく整理されておもしろかった。OHPのコピーが欲しかったので、先生に直接交渉して、借りてコピーをしようとしたら、マシンがこわれているとのこと。しかたなく、手作業で書き写すことにする。おかげで、残り3人のお話は、ほとんど耳に入らなかった。

おもしろい言葉を発見した。宿主系統と書いて、ホストシステムと読むらしい。したがって、「X会社のホストシステムは、Aである」を中国式に書くと、「X単位的宿主はA」となる。マシンのために皆がアクセク働いているのが想像できて、とても皮肉な感じがする。

下田 博次

第1日目印象に残ったのは、落水先生のレポートと上海ソフトウェア・センターの実態調査報告だった。

落水報告は、ソフトウェア工学の技術的發展を丁寧に、分かり易く説明していたので、中国側に参考になったと思う。また、私自身も考えを整理できた。特に、学界論文がどういう分布の仕方をしているのか、研究者たちの関心の集中傾向もつかめておもしろかった。

上海のサーベイで、興味が深かったのは、ソフトウェア要員の年齢分布と、労働力の輸出に関するデータだった。中国にとって最も望ましい日中ソフトウェア合弁事業のあり方とはどんなものか。それが、実現する条件は何か。もう少し関係者に聞かなくてはならないと思った。

盛田 政敏 (KCS)

落水先生の過激な(?)問題提起はおもしろかった。北京大学の楊先生の話の聞いていると、中国も日本も、そし

てアメリカもソフトウェア工学上の理論的な話題は、同じだと感じる。だが、その実践レベル、産業における応用レベルを考えると、かなりの差異があり、中国では、もっともその差があるのではないかと感じる。

レセプション： こんなリッチなパーティをやられては、次回の日本での開催が大変だろう。市や国家がバックにある中国と、任意団体のSEAの組織的な差を克服して対等につきあうには、かなりしんどい。

佐原 伸 (SRA)

基調講演では、落水先生と野村氏の発表がおもしろかった。やはり、過激な発言がないと眠くなる。

パーティでは、TAOさんという方がいらしたので、日本では有名なLisp処理系の名前ですよと教えてあげたら、大勢集まって来て、Lisp人口、Prolog、Smalltalkの話になった。上海大学のIBM4341上のM-Prologは、ハンガリー製で、それにデータ抽象機構を追加しているとのこと。しかし、メモリーが5MBしかない。私が5MBのMacIIでSmalltalkを動かしており、NTTの竹内さんは128MBのELISでTAOを動かしているという、うらやましそうな顔をしていた。

宮本 勲

またまたテレビの話です。

電気冷蔵庫の宣伝が出ました。果物、野菜が一杯入っています。もちろん、2ドアの最新式です。ふと、その中にバナナが入っているのに気がつきました。自分がハワイからきているので、パイナップルや特にバナナには目がいきます。しかし、ハワイではふつう、バナナは冷蔵庫には入れません。入れると、1~2日で悪くなって食べられなくなるからです。

「バナナは冷蔵庫には入れない」ということは一種の経験から生みだされた冷蔵庫の使用上のソフトウェアです。

「どうしたらバナナを腐らせないで入れておくことができるか」を考えるのも大切なことでしょう。それが、ソフトウェア工学かな？

いずれにしろ、TVや冷蔵庫はあっても、その利用がまだまだなのが、この国の実態なのです。可能性は秘めているように思うのですが、ソフトウェア産業を育成する道は、極めて遠いように感じられます。

5. シンポジウム第2日 (10月5日)

藤野 晃延 (FXIS)

第1グループの論議に参加。午前中に予定されていた中日各3名(計6名)の発表は、各自の発表と質疑に時間が

かり、4名しかできなかった。その中では、東工大の片山先生の発表が一番おもしろかった。

中国側の発表は、理論的なものが多かった。具体化も完全には終わっていないようで、今一つ現実的な意見交換に至らなかったように思う。落水先生と片山先生が、文字どおりオピニオン・リーダになってくれたので、何とか形はついたのではないと思う。しかし、英語で思っていることを表現するのはなかなか難しい。隔靴搔痒の感否めない。

他のグループに出張して様子を覗き、飛び入りで第3グループの討論に乱入したが、視覚化の重要性まではまだ中国では認識できないように思えた。

何にしても、なかなか面白い時間を持てたと思う。中国に対しては、もっと日本から技術移転を（日本がアメリカからしているように？）進めなければいけないと思う。

梶山 雄三（日立製作所）

各グループに分かれて、相互の発表と討議。中国には、まだ大きなプロジェクトを通しての実務経験は少ないように見える。そのためか、やはり、机上でのアイデア志向となる面がある。われわれのグループでは、双方の発表の方向が変わらず、残念ながら、議論にならなかった。

夜、中華そばを求めて外に出る。いろいろと歩いて、やっと見つけた。店のお兄ちゃんが、食べているそばにやってきて、なんだかんだといひだした。何とも人なつっこい人々だ。言葉が通じないため、筆談であったが、意志を通じることができた。

斎藤 信男

グループのメンバにOSや環境の専門家が多かったので、中国の国家プロジェクト SEP とわれわれが関係しているボランティア・ベースの国際（日米）協同プロジェクト SDAの比較について、かなり細かく討論できた。SEPは、階層化された仮想機械のモデルにもとづいており、第1次計画でカーネルや個別ツールを開発し、第2次計画でそれらの統合を考えている。SIGMAよりは進んでいて、SDAより少し遅れているといったところか？

夕刻、中国科学院の唐先生に招待されて、岸田・杉田両氏と西湖畔にあるレストラン樓外樓に行った。名物の魚をはじめ、おいしい料理をごちそうになる。「杭州は地上の天国」といわれるとおり、人柄もおだやかで、食事もおいしい。日本人にはピッタリの所で、去年の旅の印象とだいぶ違った感じがする。

夜更けに何人かで街を探検する。薄暗いネオンが輝く店

は、なんとディスコ・喫茶店・同伴喫茶（カーテン付）の3つが合体したものである。自由化もかなり進んできていると感じる。昨夜も西湖畔のベンチは、2人づれで満席であった。若い世代のエネルギーがこれだけあれば、きっとよい国作りができるだろう。

宮本 勲

中国側では、常に「～を作りました」とか「～を研究しています」という話がでるが、「それをどうやって作ったか」とか「問題はどうかだったのか」などの説明がない。ソフトウェア工学が盛んになった70年代なかばの日本の状態と似ている。

アメリカで何かアイデアを仕入れてきて、自分のところでも作った、という話である。オリジナリティのない話が多いように感じられる。日本側も、それほどオリジナリティのある仕事をした人たちがばかりではないので、お互いさまかも知れない。情熱は感じたが、技術的先見性は発見できなかった。まだまだ、これからである。「頑張れ！」と言いたい。

その意味で、今日の分科会はいへん興味深かった。中国側の SEP と日本の SDA を対比し、議論した点である。双方から遠慮のない意見を出した。中国では、経験上すでに「判っている事柄」を、もう一度実験しようとしているように見える。長年のツール作りの経験から得たノウハウを伝授したいという気を強くする。しかし、ハードウェア上の制限が大きい割には、非常に頑張っているようだ。少し見直す。

佐原 伸 (SRA)

設計ドキュメント再利用の分科会では、従来のドキュメントを解析しデータベース化するという方法をとるグループ、構造化分析用CASEツールなどを使って、構文レベルではフォーマルな方法を使おうとするグループ、フォーマルスペックを追求して「意味」もフォーマルに記述しようというグループが議論した。結果は、唐先生と、途中他のグループから割り込んできた藤野さんのフォーマルスペック派の主張に、他の2派はたちうちできなかった。中国側参加者は、若手があまり発言せず（もっとも、唐先生の主張にたちうちできる人は、日本人も含めて、このグループにはいなかったのだが・・・）、この点はあまりおもしろくなかった。

水谷 時雄（日本システムサイエンス）

復旦大学（張先生門下）の陳万軍君の再利用を考えた自動プログラミング（REAP）の研究はなかなか興味深かつ

た。Ada をモデルにし、将来的は AI 的な要素も含めたいとのことである。このプロジェクトには、聡明な葉雲文君も加わっている。10年後の両君に期待したい。

唐先生（中国科学技術院）のキレ味のいい質問には敬服。多くの場合、質問の答えも同時にご提出いただける。佐原さんが生まれた時には、すでにコンピュータをやっていたそうだ。祈御長命。

夜、街の酒場で、若い画家（全く人のいいパワフルな青年）と中国商工銀行のプログラマに偶然会った。筆読ではあるが、IBM4381 をアセンブラで、日立の M-240 を RPG で使っているようだ。日本に行きたいとしきりにいていた。この人は SUZUKI のバイク（1900元）に乗った好青年。酒店の家族と客3名ほどで、「北国の春」を一緒に歌った。音階名で齋唱。人の心を結び合うことができるのは、言葉だけではないのだ。

久保 宏志

私は、品質評価のグループに属して、武漢大学の何先生と2人でチェアマンをつとめた。どんな展開になるか全く予想もせず、討論に入った。予見をもっても仕方ないので、論文をあらかじめ読むこともせずに臨んだ。

午前中の発表を聞いているうちに、設計プロセスの品質、設計プロダクトの品質という2つの傘の下に、メンバーの関心を包み込めるような気がしてきたので、午後からの議論は、その枠の中に封じ込めるようコントロールした。つとめて、中国側の人々の問題と関心事をとりあげるようにした。その結果、中国の方々がどの程度に満足いただけたかは分からない。

予定の夜9時を過ぎて10時近くまで議論がとどめることはなかったが、すべてが目的指向・ニーズ指向であったとは、残念ながらいえない。日常的知的生産の場面について、相互の理解は十分でない。英語は双方ともうまくないのに、通訳を介した日本語と中国語による発言に徹しなかったのもいけなかったかも知れない。この辺の進め方をもっと丁寧になると、議論がより精密になり、相互の技術移転もうまく行くような気がする。

片山 禎昭

英語でのスピーチは、あまりうまく行かなかった。OHP資料の置き場所がリハーサルと変わるとメタメタになってしまう。大反省。

品質管理フィロソフィにおける「全員・全部門の参画」については、国家科学委員会の鐘さんから、「中国では難しい」というレスポンスがあった。ユーザ指向と上流工程

の重視については、建て前としては異和感はないようだ。

日本側からの発表は老(?)先生を揃えているのだが、中国側からの発表は卒業直後の若手揃い。問題にすることもないが、やはり中国としての、ある意味でのピーク業績の発表を聞きたかった。

威勢のいい周小姐と、信頼性モデルについて激しい議論のやりとりをしました。楽しかったけれど、少し大人気なかったかな?

6. シンポジウム第3日(10月6日)

落水 浩一郎(静岡大学)

全員で、紹興までバスツアー。中国がなんとなく好きになってきた。中国語を勉強しようかな。

途中で得た情報：大学の先生の月給は、助教授・講師クラス(40歳くらい)で150元(6,000円)、教授も200~250元程度。家賃は4元、食費(学校の生協)は40元、専門書は1冊約10元。知識階級は冷遇されている。

ところで、我々が紹興で買った銘酒の値段は、なんと81元だった。

大学はすべて国立だが、文部省管轄の他に、通産省系、運輸省系、科学アカデミー系といろいろあり、研究者の優秀さのレベル(学部卒業後、すぐ助手になる人が多い)はさまざまだが、日本人と比べて遜色なし。会話してみると、私以上の学識を持っていると感じられる若者もいる。大学の人脉構造は、日本以上に複雑なようだ。つまり、木構造で、木がいくつもある(!)。

岸田 孝一(SRA)

紹興までのバスのなかで、隣に座った上海鉄路局の金さんに、中国古代詩トランプの登場人物1人1人についての説明をうかがう。聞き手が私と野村さんなので、どうしても女流詩人が中心になってしまう。

紹興の街は、白壁と小川の流れが印象的。魯迅記念館は、想像していたより立派で大きい。生家やかれが通った塾(三味書屋)も、きれいに保存されている。しかし、唐先生の話では、文革中のこの街はまるでメチャクチャだった、とのこと。

下田 博次

紹興から杭州への帰途。黒々と連なる並木の脇に、車のライトに照らされた男女2人乗りの自転車の列が浮び上がる。先行のトラックが、かれらの横の列に接近したが、避けるふうもない。トラックも別に気にしていないという風情で、センターラインをまたぎ、大きなカーブを切って自転車の列を追い越す。我々のマイクロバスの運転手は、そ

れを見て、急にスピードを上げて、今度は先行のトラックを追い抜いた。

ところが、トラックの前には、ミゼット型のオート三輪（古いネ！）がいて、しかも、その前にはバイクがいた。驚いたことに、かれらはマイクロバスが接近しても、道の脇に寄ろうとしない。どうするのかなと見てみると（手が少し汗ばんでいたかもしれないが）、マイクロバスの方が反対車線に入り込み、前方から接近してくるトラックにライトと警笛をあげて停めてしまった。

我がマイクロバスのドライバーは、停止するトラックの横を悠然とすり抜ける。トラックの運転手も別に何も言わない。日本だったら喧嘩だ。

後で話を聞くと、中国にも当然のことだが、交通ルールはある。だから、あんな走行は、国民性かもしれない。トラック、自転車、走行者が、自分のやりたいように進んでいる。互いにその我儘を認めて、ギリギリのところ、衝突を回避する。部分的には、敏速で、せせこましい動きだが、全体としては、悠然たる動きだ。

7. シンポジウム最終日（10月7日）

熊谷 章

最終日、グループ討論の発表とクロージング・セッションの司会をした。第2グループの発表も兼ねたので、昨夜は準備で多忙だった。寝たのが3時半だった。

グループ発表は、4つのグループそれぞれ特色が出ていてとても面白く、初めてにしてはよくできた方だと思う。クロージング・セッションでは、北京大学の楊教授から日本側の積極的な態度や発表内容が高く評価された。お互いに、かなりの部分まで理解と信頼が深まったと感じた。

第3回の会合を日本で開催することにして解散し、再び空路上海に向かった。

片山 卓也

まず、第1グループのセッションの印象から：日本側は、一応ソフトウェアの設計プロセスという線に沿った発表を行ったが、中国側は、まだソフトウェアプロセスという概念が十分でないようで、仕様記述、プロトタイプングといった内容で、議論としては噛み合っていないといった感じがする。これは H/W 環境が十分でなく、ソフトウェアの生産を始めたばかりの国であることを考えると仕方がないといえる。

次に、中国の研究者、実務者について：若い人は、相当しっかりしているというのが実感です。一樣に国外に出たがっており、そのコンタクトを求めていることが、はっ

きり感じられます。これは、このシンポジウムだけでなく、これまで十日間、北京や南京の大学を訪問し、たくさんの学生や助手クラスの人たちと付き合ったことから、ひしひしと感じられた。一部の若手は、レベルが驚くほど高い人がいます。

杉田 義明

シンポジウムが終わった。ここで、全体の感想を述べる。

(1) 中国側の参加者のほとんどが、大学研究機関であったため、当初は、かなり研究的色彩が強く、我々産業界の意見とのギャップが懸念されたけれども、それは全く無駄な心配に終わった。中国側の経験が、あまりにも不足していたので、かえってよかったのかもしれない。

(2) グループ別討議は、かなりよかったと思う。全体討論では、どうしても意見の発表が限られた人からしか出てこないし、しかも、若い人はまったく発言してこない。日本の若い人の考えと同じで、技術の勉強方法について、とても悩んでいるのが分かった。

(3) やはり、たてまえの議論が先行してしまっている。品質のことなどを話題にすると、それが出てくる。日本でも確かに、JIS の規格などがあるけれど、誰も守っていないと思う。本音の議論はとてもおもしろい。

(4) 最後の挨拶のセッションは、とてもよかった。当初の予定になかった北京の鐘さんの挨拶は、迫力ある英語で、とても感動した。個々の技術だけではなく、学界・産業界の交流と日中双方の協力の重要性を訴えられた。

8. 技術訪問：上海にて（10月8日）

石井 悟 (ASP)

上海計算機工場では、「東海」という IBM-XT コンパチ機を生産している。生産台数は、年間で約 3,000台だという。街中の人の波に比べるとかなり少ない。工場長の話では、計算機の利用分野を広げることが、今、国内の課題になっているという。この国では、人件費の軽減を求めている環境がない。その意味では、「非常忙忙」な進歩は、難しい部分が多いかもしれない。その代わり、計算機利用の発展に対して、罪悪感を持つ必要がない。軟件技術が健全に発展していく土壌が、この国にはあると思う。

佐原 伸

上海交通大学では、すでに毛沢東の銅像が取り払われていた。

プログラム言語は、Pascal, Lisp, Prolog に重点をおいているようだ。14歳の大学1年生が、Turbo Pascal でプログラミングの実習をしていた。中国では、成績がよけ

れば、どんどん飛び級できるとのこと。しかし、大学に入るには、18歳の受験生よりも良い点をとらなければならない。小さな大学生は3人いた。先生も若くて美しい。

FPで回路設計をするソフトや、画像処理でISIの回路を解析するなどの研究を見学した。Micro VAX, PDP-11/7?, PC-AT, XTなどが主力コンピュータである。VAXのOSがUNIXでなく、VMSなのは疑問。日曜日は学校が閉まっていることを考えると、ハッカーは育ちにくい環境のようだ。もっとも、高さ3mはあろうかという門をのりこえている男女の学生がいた。彼等がコンピュータをやっていたら、申し分ないのであるが....

下田 博次

上海の電算機工場、復旦大学の見学は、当初予想していた以上の驚きと、新鮮な事柄が多かった。工場の方は、もう少し、生産活動に活気とはりつめた空気を予想していたが、実際は驚くほどのんびりで、ボードの組立現場などでは、ナンバープレートを雑談、談笑しながら張りつけていたりetc. OEMといっても、最もローレベルの組立作業か。

新設の工場入口に、IBM-CHINAのネームが明示された木箱が積んであった。中身はわからない。しかし、工場の技術長(?)は、IBM本社の重役が北京でPC生産工場の新設の交渉に入っているという話を知っていた。この話題で、深入りは避けたいという表情だったが、しかし、それにしても、ココムは、コンピュータや電子技術の規制緩和に動き始めたようだ。

復旦大学構内入口には、巨大な毛沢東像があり、文革を思い出す。しかし、これは、まもなく壊されると聞く。時の流れをしみじみ実感。帰途、入口であわてて毛さんの写真を撮る。意外と貴重な1枚になる?

宮成 功(富士通)

午前:上海計算機工場見学。東海(IBM/PC互換機)の組立ラインを見学したが、建物の割に機械化が遅れていた。統制経済の割に、企業の自主投資やプロジェクト承認後の自由度は高い。当然ながら、企業へのコンピュータ導入が、人減らしではなくサービスの高度化を主目的としている。中国のこうした工場を見学できて、非常に興味深かった。

午後:復旦大学訪問。学部長他の歓迎を受ける。久保さんが人民服、学部長が背広で、日中が逆転している。張先生の引率で、計算機を見学。Homeywal, VAX, IBM 5550, PC/AT等、機種は多彩。ただし、一昔前の機種と違った実情。大学構内の印象は、「素晴らしい」の一言。

9. 上海から武漢へ(10月9日)

藤野 晃延

今日は、再々の移動日。上海よりB737で空路、武漢へ。概ね1,200kmの旅なり。昨日より、水谷・斎藤両先生帰国の由、一行の人数減る。更に、本日片山先生帰国、久保氏も明日帰国故別行動なり。櫛の歯が抜けるように一寸淋しく感じる。しかし、既に行程の半ばを過ぎ、ホームシックの想いがそのように感じさせるやも知れぬ。

上海国際ホテル出発後、空港近郊の動物園に寄り熊猫を見る。日曜日故一般見物人多し。そこに特別のバスで乗り付けるVIP扱い。大いに驚く。特別扱いは嬉しく思へど、多くの一般客への迷惑を思うと心苦しい一幕だった。しかし、熊猫2頭は流石に珍妙なり。上野動物園にても見た事無し。されば有り難く拝見し、一興をなす。

上海空港にては、荷物の登録で一悶着有り。通訳の方々が、激しくカウンタの女性係員と遣り合う。中国ではよく目にする光景なり。それが災いしてか、搭乗は離陸10分前になる。カウンタから機まで空港の滑走路を歩く。日本では味わえぬ事なり。結局、機の最後尾に押し込められるように着座、直ちに離陸。水平飛行に移るまで、後部のスチュワーデスは寝ている。水平飛行後も暇があると、ダンス(ディスコ?)の練習を2人でやっている。全く中国民航の性格を表している。笑止。

武漢到着後も荷物の引き取りに手間取る。中国に居ると気が長くならざるを得ない。熱烈なる歓迎を武漢大学の何先生から受ける。恐縮の極みなり。早速バスでホテルへ。荷物を置き、遅い昼食後、武漢大学見学へ。広く雄大な建築物と景観に只驚嘆する。

方 学芬(静岡大学)

動物園で可愛いパンダを見てから、武漢へ向かいました。武漢は、長江の中流にある古い都市です。現在人口は、6百万人近くになっています。泊まっているホテルは、今、武漢で一番高い建物です。部屋から長江が良く見えます。

武漢大学の見学は、とても楽しかった。懐かしい学生寮と学生食堂は、10年ほど前と変わっていません。その時の夢がもう一度、目の前に出現しました。そして、また現実に戻って、ソフトウェア工学研究所を見学しました。よく準備されており、よい討論ができたと思います。

石井 悟

あらためて、この国のスケールの大きさに圧倒される。長江、武漢大学から見た東湖、そして地平線。とにかく大きく、しかも美しい。そして、大学キャンパスの美しさと

ゆとり。私たちが貧しく忙しい国から豊かな（文化）先進国へ来たことをあらためて思う。昔、日本は、ここを侵略しようとした。つくづく馬鹿げたことだと思う。

杉田 義明

武漢は、想像以上に工業都市であった。街には、荷物を満載したトラックが広い道路の上を走り、交通渋滞が当たり前のように続いている。有料道路さえある。街中がけむり、ほこりだらけで、その広い道路の脇には、自転車・歩く人がひっきりなしに通っている。街を横切る長江には、これもひっきりなしに船、はしけ、客船が流れている。上海がジャズのイメージなら、ここは、ロックだ。メトロポリスの薄もやの中を労働者がもくもくと仕事に向かっている。街は活気にあふれ、品物や人があふれている。しかし、マリアはどこにいるのかな？

久保 宏志

8時半に、武漢に移動する人たちを見送った後、片山さんと2人で上海の街を2時間くらいぶらついた。片山さんは、半袖シャツを着て、リュックを背負っている。ズボン、ジーンズである。一方、私は、人民服を着て、ビジネススルックである。上海でも杭州でも多くの人が体験した「兌換券を売いませんか？」と声をかけてくる人の数は、片山さんの方に多い。圧倒的というほどの差ではないが、あきらかである。この差をもたらしたのは、人民服であるというのが片山さんの分析である。並んで歩いていても、片山さんにしか声をかけないのだから、この分析は正しいように思われた。

お昼に片山さんを送り出した後、また外に出たのだが、人民服を着ていたからか、1:1.7や1.8ではなく、1:1交換をオファーする人が現れた。私は応じた。それは、大世界（遊戯場）に行き、入場料1元を払おうとしていたときにおこった。私の後ろにいた子連れの中年男が、人民元の5角札2枚を出して交換を申し出てきたのである。こんな行動に駆り立てる彼の経済状態を思い遣って、暗い気持ちになったが、黙って交換に応じた。彼には兌換券だけが見えて、私の人民服は目に入らなかったのかもしれない。

旅行社がくれたパンフを見ていたら、フランス料理を出す店があると出ていたので、その店に行くことにした。シャワーを浴び、人民服をジャケットに着替え、意気揚々と出かけた。オニオンスープとグリーンサラダは頼もう、ワインも頼もう、メインディッシュはメニューを見てからにしようと思っただけで出かけた。店に入り、席に座った。

それから店を出るまでの短い時間は、悲惨であった。頼

もうと思っていた物は何もない。やむをえず、ビールとスープとステーキをオーダーして、失礼にならない程度に食べて、そそくさと退散した。きっと身体をこわすだろうという悪い予感が走った。手遅れかもしれないが、場所を替えて食い直して、消毒することにした。すぐ近くの和平飯店に走った。杉田さんから教わっていた別館のレストランに入った。ほっとした。ビール1杯と五目ヤキソバが、この日の私の夕食であった。

夕食の後、向いの館に入って、ジャズバンドの演奏を聴きながら、アルコールを飲んだ。ブラディマリーをとってみたが旨くない。マオタイ酒にきりかえて、数杯飲んだ。これは旨かった。

10. 武漢大学（10月10日）

落水 浩一郎

午前中、武漢大学ソフトウェア工学研究所の研究内容を見る。まだまだこれからのテーマが多かった。ただ、大学院生はなかなか優秀で近代的な雰囲気をもち、英語も私以上にうまい。特に外国に行った訳ではないそうである。私も含め、日本の大学関係者の語学力は、まことに情けない。

午後は、宮本先生、岸田さん、私、片山社長の4人で、学生たちを相手に講演。なかなか、話がかみ合わないような感じがした。

夜、方さんの案内で、漢口の繁華街に出掛けた。トロリーバスに乗って行ったが、バスがまだ止まらないうちに戸にはりつき、その後押し合いへし合い乗っていく様子は、見ていてポカんとした。我々一行12人は、かろうじてバスに乗ることができた。街で食べたのは、豆皮と鶏スープとビールである。ビールは、炭酸を抜き温めたものがどんぶりに入ってきた。豆皮とスープは、味が良かった。

上海→杭州→上海→武漢と旅をしてきて、武漢に来て2つの大きな収穫を得た。揚子江を見て感動できたこと、トロリーバスに乗ったことである。だんだん中国に引き込まれていく。そのあと部屋で放歌高吟。これで明日は早く目が覚めるだろう。

梶山 雄三

ホテルの目の前に、揚子江が流れている。船が、ボーと汽笛を鳴らしながら、朝もやの中を動いている。この景色も、ちょっと筆舌に尽くしがたい雄大な眺めだ。何ともぜいたくな旅になった。頭に入らないくらい、あまりにも巨大。

朝は、武漢大学でデモを見る。まだまだ立ち遅れている部分と、最先端をいつている部分がある。これは、中国の

例のパターンだ。

午後からは、日本側のプレゼンテーション。皆さんそれぞれ、その道の一人者であり、話されていることを興味深く聞いた。

片山 禎昭

武漢大学での講演は、「中国的ソフトウェア品質管理のための品質機能展開」という内容をトライした。方さん（武漢大学から静岡の落水先生のところへの留学生）の通訳で日本語で喋ったため、中国の人も比較的よく聞いてくれたように思う。シンポジウムの時の英語スピーチに比べれば、かなりベターな出来。ついでながら、方さんには、公私ともに筆舌に尽くせぬほどお世話をいただき、熱烈大感謝。（夜の部では、方さんのおかげで、中国のバスに乗ることができました。）

方 学芬

ホテルにタクシーが来ません。しかたなく、バスで老通城というレストランへ行きました。そこで、豆皮と鶏湯というものを食べました。大学時代、時々友達と一緒に食べに行きました。メニューはやはり同じですが、味は以前より落ちたみたいです。

汚い机とか、口げんかをしているお客さんとかがいるのが今の状態です。日本と比べると、恥ずかしい気がします。もともと中国で提唱された「精神文明」は、「物質文明」の要素が追いつかなかつたりしたために、まだまだ実現されていません。中国人として、いま、そしてこれから、何をすべきか分かっていない人が多いようです。

中野 秀男

7時に起きるが、昼の武漢大学の昼食にそなえて、朝食は抜く。中国滞在も1週間たつと、さすがに食事のペースにも慣れてくる。1回当たりを少なくするか、1回抜くかである。いわゆる下町の食事を見ていると、一膳一菜であるのには、最初びっくりしたが、今では、これが中国の水準だと理解した。武漢大学のコンピュータの設備とその食事の差が、これが中国だろう。

今日は、一日、武漢大学技術訪問。朝は、並列計算の人がいるので、1時間半ほど話をする。アルゴリズムの分解理論をやっている人であった。分解が並列になるのは当然なのだが、相手の知っていることをできるだけ聞くようにした。中国の研究は、やはり、島で孤立してやっている感じがした。ジャーナル類は、たくさん読んでいるようだが、肝心のポイントがおさえられていないのではと思った。この分野は、日本にいても流れはつかみにくいの、中国で

はもっとやりにくいだろう。

午後の1時間半は、何先生をはさんで、研究所だけでなく、他学部との関係などを聞く。何先生は、やはり、自分の研究のあたりを議論したかったようであるが。

2時半から4時までは、旅団の悪い人たちと東湖見物。大学の眺望やコンピュータと住居の格差を再び感じる。東湖では、魚が眠ることを確認。これが、まさに「武昌魚」らしい。これから林香氏を武昌魚と呼ぶことにする。あとは、黄鹤楼の見学。

夕食は、ホテルの食堂に岸田、野村、宮本、熊谷、林、あとから下田の悪童連が集まり、白酒（といっても甘酒ではなく、マオタイ級の強い透明な酒）の乾杯つづき。せっかく、最初からセーブしてきたのに残念。

藤野 晃延

今日は、武漢での第2日目。中国の人は、一般的に朝が早いようだが、武漢大学の方たちからの依頼スケジュールは、かなりハード・スケジュールになっていることもあるだろうが、朝が早い。今朝は8時出発となる。朝食の時間も結構かかるので、7時には起きなければならない。連日のハード・スケジュールの中で、朝の1時間は貴重だ。その日一日のコンディションを左右しかねない。

僅か30分のホテルから武漢大学までの道のりも、泥のように眠って過ごす。目覚めた時、一瞬、自分がどこにいるのか、どのようなシチュエーションにいるのか、判らなくなってしまう。全くコンテキストを失ってしまうくらい、深く寝込んでしまったのだ。しかし、お陰で今日のデモ及びディスカッションの間、一度も眠くならなかった。

中国の人は、朝早い分、午睡をとる。校内でも、午後暫く机に伏せて仮眠している学生の姿を見ることができる。合理的なシステムだ。

午前中、若手の人たちとオブジェクト指向とプロトタイプリング環境について、1時間ほど話し合う。中国の若い人たちは英語がうまい。核心を衝いた質問、意見がビシバシと飛び交う。特に、ST-80上の、我々の環境とプロダクトの話をする、非常に興味を持ったようだ。4、5人に囲まれて、こちらも一生懸命に応答する。また、ここの実験システムもオブジェクト指向の概念を採用していることもあり、こちらからも質問、比較、検討する。

なかなか、皆、クレバーである。ハードと周辺機器が充分でないこと以外は、ソフト工学の最新のテーマ、動向をちゃんと押さえている。ST-80には、皆かなり興味があるようだ。彼等に思い切り使わせてみたい。きっと、ST-

80の強力なインフラストラクチャ構成の原動力となってくれるだろう。それだけのパワーは充分持っていると思う。それは、また、ST-80自体にとっても、大いに意義のあることとなろう。

盛田 政敏

武漢大学訪問。デモおよび討論。中国の人たちは、とにかく熱心で、やる気旺盛である。特に何先生を中心とした武漢大学の皆さんは、若い人ばかりで、そのエネルギーは敬服する。

しかし、いろいろと話を聞いていると研究のための研究という気がしてならない。大学の研究者としては、第一線で、世界的なレベルで技術開発や研究をやりたいという気持ちは分かるが、中国の産業の現実や経済の現実を見ると、それだけでなく、もっとやらなければならないことも多いのではないかと感じる。それらは、一体誰がやるのだろうか？そのような問題について、コンピュータや、ソフトウェア技術者の果たす役割も大きいものがあると思うが、そういう話はあまり聞かれない。

コンピュータ化以前の工業化や産業の高度化、コンピュータ技術の高度化だけでなく、より多くの技術者の育成、そして、何よりもコンピューターリゼーションの推進等、技術以前の文化や経済、そして社会基盤の問題は大きい。それらの社会的理想をぬきにして、技術的議論や研究が有効なものとなり、実りある成果につながるのだろうか？

楊 啓延 (SRA)

武漢大学軟件工程研究所を見学し、同世代の研究者と話を交わしているうちに、少しずつ中国におけるコンピュータサイエンスの現状がわかってきた。情報不足の罪で各グループとも情報ルートの確保に必死。また、研究も自分で客観的に位置づけることができない。このような状況を打開するためには、日本サイドは、ただ研修者の受け入れだけでなく、短期でもいいから、エンジニア、研究者を中国に派遣し、共同研究を行うような企画もほしい。

11. 武漢から北京へ (10月 11日)

熊谷 章

早朝に武漢から北京に飛ぶ予定だったが、空港に着いたものの飛行機がなかなか飛んでくれない。小一時間待った。60人乗りプロペラ機で、北京に向かう。物凄い騒音と沢山の蚊に参ってしまう。左側のプロペラのエンジンが、時折、変な音を発する。右側の窓の外から見える翼の一部を見ると、釘がとれそうだ。北京まで丈夫に飛べるだろうか。飛行機の出発が遅れた理由は、同型の整備がうまくいかな

くて、機体を変えたいらしい。搭乗券の機体番号と違った番号になっていた。

機中から、長江の様子が良く見えた。大きな中州もある。霧に包まれた長江一帯と水田風景が懐かしく見える。機体は、かなり揺れながら、一生懸命飛んだ。隣席の片山社長は、蚊を5匹くらいやつつけて、窓ガラスに死骸を張り付けている。スチュワーデスは、南方のインド系の人のようである。目、鼻、口が大きく、身体全体が丈夫そうだ。ハミグアのジュースと何とかビスケットが一箱出た。それに、皆、キーホルダーを一個貰った。つい最近、飛行機代がいつせいに2倍に値上げしたそうだ。だから、客がかなり減ったという。参考までに、上海-武漢60元、武漢-北京150元。

北京近くでは、サービスなのか、かなりの時間低空飛行をしてくれた。林が多く、見渡す限り広い平野である。所々に羊か山羊の群れが川辺で遊んでいるのが見えた。果樹園も多くあった。今まで見たどの土地よりも美しい。北緯40度というから、秋田くらいの位置だ。バスで北京飯店に向かう。街並が素晴らしい。今までの街並も美しいが、ここは二重、三重の街路樹になっている。つまり、道路の周囲が林になっているのだ。この木の組み合わせが次々と変わる。松、柳、ポプラが多い。南の方は、ほとんどがブラタナスだったのと較べると大きな変化である。組み合わせが次々と変わる。松、柳、ポプラが多い。

岸田 孝一

北京飯店は、天安門横のすばらしい場所に位置しているが、なぜか駐車場がないというおかしな一流ホテル。内装が新しくなったのはよいが、ところどころ建てつけが悪い。藤野さんの部屋のドアが内側から開かず、2度にわたって閉じ込められてしまう。何とか救出し、部屋を換えてもらったらもう夕方近い。

夜、山東料理のレストランを予約し、タクシー3台に分乗して出かける。われわれの先頭車は無事に目的地へ着いたが、あとの2台が待てど暮らせどやってこない。10人前の特別料理(1人前なんと大枚1000元)を4人であらかた食べ終わったところに、やっと到着。そこで一句:「こんなことでは、みなさんとでもシルクロードでは生きて行けませんよ」

盛田 政敏

天安門から故宮を一巡したら、歩き過ぎて疲れてしまった。左右対称に作られた建物と同じような宮殿がいくつも並んでいて、今自分がどこにいるのかも判らなくなってし

まいそうだ。迷路のようである。故宮アドベンチャーゲーム（宝物探し）でも作ったら、面白いソフトになるだろうと思った。くりかえし、くりかえし同じようなシーンが現れても、でもどこかが少しずつ違う。そのくせ、なかなか自分が見たいと思うものに出合わない。

それにしても、中国の皇帝は、いつの時代も桁はずれのスケールの建造物を残している。それに費やされた金や人間の労働を思うと、国が亡びるということも実感できる。時の権力とはいえ、狂気ではないかと思う。

中国は、「気」の国である。

12. 技術訪問：北京にて（10月12日）

梶山 雄三

北京軟件技術センターに行く。オブジェクト指向技術の討論だが、専門的な知識を持ち合わせていないので、後ろに引っ込んで聞いていた。何も判らずとも、その道の専門家の話すことを聞いていると、いろいろと識ることができ参考になる。

午後から北京航空大学のデモを見に行った。ソース・エディタ、構成管理支援環境、グラフィックスのデモがあった。特に進んでいるという感じは持てなかった。その後、北京大学を訪ねた。大学の中を見て廻ったが、本当に広々としている。池があり、エドワード・スノウのお墓があり、丘がある。学生たちは、実にのびのびとやっている。中国のお国柄のイメージは、全然と違って良いくらい、日常の生活を見る限りでは学生、庶民にはない。日本の大学の雰囲気となら変わることはない。

岸田 孝一

午前中、ソフトウェア・センターでの討論は、時間が足りず、とくに中国側の若い人たちの意見が聞けなかったのは残念。休憩時間に清華大学の凌先生と立ち話。「いずれ日中の若手ソフトウェア技術者・研究者を集めたワークショップを開こう」ということで意見が一致した。さて、どうやって実現させるか？

午後の最初は、航空航天大学の見学。SEPプロジェクトの一環だというテスト支援ツールを見たが、ありきたりのカバレッジ計測の域を出ていない。文革時の遅れを取り戻すための1ステップか？

わずかな時間のすきまを利用して、西太后の夏の離宮を駆け足で見学。広大な人工湖や全長730メートルの回廊に目を見張る。その長い廊下を抜けた所に、大理石で作られた2階建ての豪華な船が、湖の岸に浮かんで(?)いる。「見掛けは立派だが、動かないところがどこかの国のナシ

ョナル・プロジェクトに似ている」とだれかがいったので、大笑い。

夜は、楊美清先生のお招きを受け、北京大学の食堂で会食。食卓で大学の組織やカリキュラムの話をしているうちに、近くサン・マイクロとの合併で、ワークステーション実験室を作るのだという。大学が教室と講師を提供し、サンがワークステーションを17台寄付して、ユーザ教育のセンタをやるのだそうだ。だれかが、「ココムは？」と尋ねたら、「あれは日本の手を縛るための仕掛けで、米中間の取引には関係ない」と一笑されてしまった！

中野 秀男

朝、皆の集合が遅れて、マイクロバスが駐車違反を取られる。

まず、中国軟件技術開発中心に行き、オブジェクト指向に関するディスカッション。しかし、なかなか討論にならず、一方通行の感じもあり、だんだん話題が計算機環境の話になってきた。何故、PCばかり中国にあるという話にもなった。

夜、落水先生に聞いたところでは、PCは台湾で作られ、香港のディーラーが扱い、中国にも会社があって、且つ、中国語が扱えるので売れるのであろう、しかし、UNIXとMACだけの大学（研究所）もあるという話である。

またまた、ビール付の昼食の後で、北京航空学院へいき、2つデモを見る。しかし、前半のは、ほとんど眠っていた。その後は、離宮見学。人口の池にしては大きいし、長廊下もすごかった。長押しには、すべて絵が描いてあって、当然すべて違う。中国人の説明によると、西太后がぜいの限りをつくした場所で、中国が近代化に金を注ぐところをすべてここにすぎこんだため、このようにすると破滅しますよという見本のために残してあるそうである。

離宮の後は、北京大学訪問。北京大学と清華大学は、となりあわせであった。副学長さんが出てきてくれる。計算機科学技術研究所高級エンジニアの愈さんは、5年前に阪大の電子工学科の寺田先生のところにいたことがあるとのことであった。30分ほど北京大学の中を散歩する。昔の庭園をそのまま大学にしたようで、さすが武漢大学と風景は肩を並べるだけのものはあった。外国からの留学生も多いそうで、外国人専用の食堂の奥で夕食となった。味オンチの私には、なかなか比較はできないが、周りの話を総合すると、今回の旅行のなかでは最高であったらしい。

13. 北京にて：技術訪問／観光（10月13日）

石井 悟

今日、天津にいる知人が訪ねて来た。こちらからは、出発前のスケジュールしか送っておらず、途中、連絡がうまく取れなかった。朝、フロアで、偶然、林さんと楊君の会話にでた「石井」という名を聞いて、林さんたちに話かけられたとのこと。その会話がなかったら、お会いできなかったかも知れない。

この人は、天津中医学研にいるお医者さんで、京都大学に6年いらした。日本語はたいへん上手で、在日中は中国の事情などを教えていただいた。今日は、故宮、王府井などを案内してもらい、現在の中国政府の政策や生活の変化などを教えていただいた。謝謝。

下田 博次

午前中、原稿を書いて、午後、故宮をまわる。まず、その規模の大きさに驚く。平城京など模型のようなものだ。この宮城というより、聖市街は、陰陽五行思想のプロトタイプモデルだ。中国の神話、宇宙認識のフィロソフィーを、目に見える形にして、俗界にそびえ立つ聖地を作ろうとしたものだ。イリアードに言わせると、「中心」の思想、「再生」の期待を、民の精神構造に植え付けるための演劇空間なのだろう。中国人は、こういうことをするのだ。日本の大和朝廷は、そのサブモデルに過ぎないものを移植しようとしただけだ。いつもそうだと思うところ、なんとなく辛い。

皇帝が、故宮中で農耕の儀をとりおこなうというのももしろい。民衆は、宮城で行われるセレモニーの意味を、本能的に知っていたのだろう。それが、彼等の心の中で行われている聖と俗の精神活動に重なっていたからこそ、帝国は存在し得た。

毛思想もまた、天安門上からドラゴンにまたがって、昇天しようとした。だが、玉座の玉が彼の頭上に落下したわけだ。これから、ドラゴンにまたがろうとする者は、もう血と肉を持った人格ではないかもしれない。

藤野 晃延

朝、万里の長城に行くグループを送り出し、中国科学院の唐先生のところを訪問する。小生も、長城には訪れたことはない。しかし、これまでの経験で、もし観光地を訪れるなら1日ではほとんど何も見られないことがよくわかった。フランスのヴェルサイユやルーブル博物館と同じで、1週間或いは1か月をかけてないと見切れない所が多い。再訪を期すためにも、敢えて今回は名勝に目をつぶる。自戒である。

他に岸田、林、佐原、楊の5人で出かける。まず、研究

活動の概要を紹介していただく。話の内容からすると、今回訪問した大学/研究所の中のピカーである。ほとんど、欧米と同じレベル。研究の方向づけがうまい。唐先生のバランス感覚は抜群だと思う。

テンポラル・ロジック言語をベースに、属性文法によるコンパイラ・コンパイラや DFD エディタなど、実用化を意識したシステムを SUN 上に実現している。こうでなくてははいけない。

他にもハイパーテキストを応用したソフトウェアDBとか、カテゴリ理論にもとづくオブジェクト指向のフレームワークとか、内容が充実している。小生の所でもフォーマルなアプローチとオブジェクト指向との融合を計っているが、あまりにもよく似た方向を狙っているので驚いた。と同時に、こちらの方針が間違っていないことも確認できたわけで、それも嬉しかった。

昼食には北京ダッグのフルコースをご馳走になる。やっぱり美味。ピータンとか前菜も、日本のものとは全然別ものだ。こんなに旨いとは信じられないくらい、日本の中華料理は中国の味のイミテーションに過ぎないことが良く分かった。何にしても、もう何回かは来なくてはなるまい。

宮成 功

万里の長城と定陵を見物する。定陵の建物及び地下宮の規模は、非常に大きく、皇帝の権威を象徴している。途中、青空市場に寄る。みやげ物ばかりが野外に林立する様は、日本の門前市並みだ。盛田さんが、100 元を 10 元まで値切る。万里の長城は、その壮大さに驚く。景観、スケール、まさに「壮大」の一言。

夜は、北京航空大学よりディナーの招待。

ともかく、すべて珍しく、スケールの壮大さに圧倒される中国だ。こんな楽しい旅は初めてだ。

14. 再び上海へ (10月 14日)

岸田 孝一

天安門の先に、削り麺の店があるのを昨日見つけておいたので、朝食を食べに行く。さすがに北京は広い。すぐそこに見えているのに、片道30分もかかってしまった。毛沢東記念堂も人民大会堂も見学者でまさに長蛇の列。尻尾が見えない。あきらめてホテルに戻る。

午後遅い飛行機で北京発。6時半上海着。故郷に帰ったようでほっとする。そのまま静安賓館へ直行。今夜は日本側の主催で、お世話になった上海ソフトウェア・センタ、海外技術交流センタの関係者をお招きし、ささやかな感謝の意を込めたさよならパーティ。明年在日本再会!

10時半過ぎ、南京路を散策するが、あまり人が出ていない。上海には花金現象はないのかな？

下田 博次

北京を出発するまで鼻水が止まらず、機内でも熱っぽい状態のまま苦しむ。それが、驚いたことに、上海に降りたつとたん鼻の通りがよくなり、あっという間に普通の状態になった。ウソと言いたいほど。出迎えをいただいた上海側の人たちに、このことを話すと、「北京より上海の気候のほうが、体によいのだ」と喜んでくれた。

夜、静安賓館でのパーティは、大いに盛り上がったが、接待にあたった中国側の苦勞も実感された。スケジュールの細かい狂いなどにも、結構気を使っており、まずいことがあれば、批判、自己批判など、オープンに披露された。

パーティ後、上海市内の酒家に4人連れでお別れに行く。ママさんをはじめ、縁者まで来ての歓迎ぶり。親父は、特に気を入れて料理を作ったようだ。

方 学芬

3日間武漢に里帰りして、まったく日本語を話さなかった。北京から戻って来た皆さんに会った時、うまく日本語を話せませんでした。日本語をべらべらと話したいと思っています。しかし、まだまだです。皆さんは、14日間も中国語を話しています。「ニイハオ」「シェーシェ」だけではなく、いろいろ話せます。今度、中国に旅行したら、たぶん困らないと思っています。

15. 帰国 (10月15日)

落水 浩一郎

いよいよ、中国最後の日である。午前中、本屋に出かけ、中国の計算機の専門書、その他を4、5冊購入した。「中国語を勉強するぞ！」という決心が、果たしてどこまで続くだろう。

熊谷 章

今回の旅行は予想通り、心の旅路となった。杭州、上海、武漢、北京、みんなそれぞれ人の心も優しく良い街である。中国の優しい人の心に触れると、もう心が溶けてしまう。日本はあまりに狭すぎて、中国はあまりに広すぎる。ここ暫時は、老子を堪能しようと思う。そして、中国の人々と心の会話をしようと思う。

楊 啓延

短い2週間の間に、急ぎ足で中国のソフトウェア関係の研究所、大学の研究室を見学した。日がたつにつれて、中国のソフトウェア研究の問題は、情報や費用の不足よりも、社会体制の方が大きく左右していることが分かってきた。

各部所のなわばり意識は、想像以上のものでした。そのためなのか、研究水準は、部所によって、かなり格差がある。これらの問題を一日も早く見極めて、中国との協力体制を整える必要があると感じた。

野村 敏次

中国最後の日。午前中、若干の買い物を行う。集中力がなくなっているのが分かる。休みなしなので、身体がだるい。今、日航の機中。ほっとする。ここで今回の総括を試みる。

いろいろな人がいろいろな人と会い、いろいろな事を話す。日中の技術交流は、やっと形を成してきたところだと思いが、今後、これをどう継続し発展させていくかが難しい。表面的な交流から中味を考えた交流へと文化を求められている。更に、中国側の要望と日本の要望が、どこまで合致できるかもこれからの課題である。

現時点においては、双方とも利害を表面に出していない。しかし、そろそろ次回あたりから、それが具体化してくるであろう。日本側のスタンスを明確にしておきたい。更に、どういうスタンスをとるかに関連するが、SEAという任意団体を中国側の大学や研究所と人的交流を含めた技術交流が、果たして日中双方の希望通りいくものなのか否か、私には分からない。

おそらく、特定の個人や会社での対応には限度があり、組織体としてのSEAに何か期待されているのだと思う。そのためには、組織の強化(組織体としての独立性)を保つ必要があると思う。星霜移り、人は変わっても、SEAという組織体と中国との結び付きは変わらないと言い切れる状態になって欲しい。

事務局として、いろいろご苦勞された杉田さんに、最後に謝意を表したい。また、出席された皆様、ご苦勞様でした。

FSFってどんなところ？

—環境分科会・5月例会から—

0. はじめに

環境分科会の89年5月例会（5月31日、SRA（株）にて）では、昨年〔88年〕から1年間、アメリカはボストンのFSF（Free Software Foundation, Inc.）で仕事をされてきた引地信之さん〔SRA〕をゲストスピーカにお招きして、GNUプロジェクトの様子や今後の方向性などについて話して頂きました。「しばらくはセミナー屋にはならないぞ!」と固く決意しているSIGENV世話人グループですが、今回は内容の点から言っても多くの人にGNUについて考えてもらえるきっかけになればと思います、SEA以外のサイトにもアナウンスして参加者を募ったところ、総勢で30余名の方に出席を頂き、情報交換といった意味からも非常に有意義な時間を共にすることが出来ました。

1. ストールマンはすごい!

基本的に引地さんの話は、参考資料〔2〕に沿った内容でした。しかしその間々に挟まっていたナマの話が非常に面白く好評でしたが、それらを全て書くことは到底出来ません。私が面白いと感じた範囲で書き留めたことを羅列して報告に代えさせていただきます。

・クリーンルーム

GNUのフリーの精神を保つためには、クリーンルームで仕事をするを基本にしている。またその意味で、FSFで雇う人は（極端に言えば）Unixのコードを知らない人が欲しいとストールマンはいう。しかしリバースエンジニアリングなどの問題もあるためブルーゾーンには慎重。

・チップの設計をしたことがある

ストールマンはEmacsやMITのAIラボでのハッカーとしての印象しかないが、引地さんがあるところを尋ねたときに壁に掛かっていたチップのサーキットの図面にストールマンの署名もあってびっくりしたそうです。幅広い知識を持った強者なのですね!

・FSFってどんなところ

事務全般をする女性がいるところは、あるビル1フロアにあるが実働部隊は（ボランティアで参加した引地さんも含め）MITのパブリックスペースの一部を借り

切って（占拠して!）仕事をしている。これを見て、ウィンストンは色々とうるさいことを言うてくるが、ミンスキーなどは非常に好意的であるという。またストールマン自身は、MITを退職してからも1部屋を相変わらず使っている。なんとそこに“寝袋”で寝泊まりしているそう。それというのも1度自分の借りていたアパートで火事が起きて以来ずっとそうしているらしい……

・Macなんか使うな!

引地さんがあちらに行つて早々に、日本語でドキュメントする環境を無いため持っていったMacを使っていたら、ストールマンが目の色を変えて飛んできて……。例のAPPLEの問題があるからとにかくMacはダメなそうです。

・どんなマシンが理想なの?

どんなマシンでも彼（ストールマン）にとっては良いみたい。たださすがにSunを（DODから間接的に）寄付してもらった時は嬉しかったようで、皆に自慢していた。

・どんなことに関心がある?

マニュアル大好き。また、みんなに騒いでもらえるソフトウェア作りが好き。

・ストールマンの立場は

FSFの社長だけれども、それはボランティアでやっているんでFSFから給料はもらっていない!!!。自分の生活費は、講演会などや自前の仕事を時々やって稼いでいるみたい。

・彼の作業環境は

Sunのコンソールを使っている。Xウィンドウは使っていないが、それはソフトウェアのトラブルの原因を最小限に止めたいからのようだ。

・テストはどうしているの?

全てのマシンのためのテストが出来ているわけではない。だからこそFSFで使用出来ないマシンへの移植やテストは、みんなが協力してやって、その結果をFSFに返してもらいたい。

・GNUの配布（デリバリ）の基準は

ストールマンは、なにがなんでも絶対に2ヶ月に1度

出すと頑張っている。(それを1つのノルマにしている)

・何をすれば(日本からも)貢献出来るか?

GNUのソフトウェアをFSFから購入するだけで、貢献になるし、併せて寄付も受け付けている。

2. おわりに

個人的なことでは恐縮ですが、私が初めてGNUのことを聞いたのは、確か(事実上の第1回目の)SEAMAILの編集会議の席であったと思います。そこで編集企画を考えているときに(新しいことの情報には滅法詳しい)Fさんが、「今アメリカでMITにいるリチャード・ストールマンが無料でソフトウェアを使えるようにしようという運動をしているんだ」という話してくれたのですが、またまたその会議の席では“パソコンソフトの違法コピー”などの話題もチラリと顔をのぞかせたりしたので、「ウー、またその手の話題か! しかし何と過激な発想なんだ」と内心思っただけでその場は終わりました。

あれから4年の間に、ソフトウェアを取り巻くハードウェア/ソフトウェアの環境変化もそうですが、それ以上にソフトウェアに対する“意識”も大きく変化してきたように思います。そのひき金となったのは当然Unixを中心としたコミュニティの力が少なくないのですが、それに関してはGNUプロジェクトの与えた影響も非常に大きなものだと思いますし、そのことを改めて確認することが出来ました。

【参考資料】

- [1] GNUダイジェスト1989年6月(引地恵美子, 引地信之(訳))
- [2] 引地信之, 引地恵美子: GNUプロジェクトの現状とGNU Cコンパイラ, Computer Today, No.31, pp.38~47, 1989
- [3] J. Markoff: One Man's Fight for Free Software, the New York Times, Jan. 11, '89
- [4] R.M. Stallman (竹内, 雨海(監訳)): GNU Emacsマニュアル, 共立出版

【会場でのアンケート】

佐々木 崇郎〔慶應義塾大学〕

SEAの会員ではないのに参加させていただきありがとうございます。Mr. StallmannならびにFSFは立派だと思っております。MachなどのDARPA資金のprojectの成

果を利用するようになると、海外(つまり日本に持ってくる場合)に持ち出すときの問題が大変そうで、Mr. Stallmannの言う copyleftがたもてるかどうか心配ですね

二方 厚志〔電力中央研究所〕

- ・余談がおもしろかった
- ・FSFは正しいと思うが、あまりにもStallmannにたよりにすぎてではないか?

鈴木 裕信〔SRA〕

texinfoの日本語訳は2章から先にすすんでいません。6ヶ月以上手をつけてないのです。ごめんなさい。来週から少しずつ訳します。(・・・と先のぼしにする私であった)

半田 剣一〔電子技術総合研究所〕

FSFの現場の状況が非常に具体的にわかり、大変楽しく拝聴できました。また間接的にR. M. S.の考え方がわかり役に立ちました。

児玉 靖司〔日本サンマイクロシステムズ〕

大変生々しい様子が聞けたので、興味深く聞くことができた。

松本 豊〔日本サンマイクロシステムズ〕

- ・Stallmannの実体がもうすこしわかるかな?と思った
- ・GNUのバッチがほしい
- ・こんど日本でもGNU大会をやるといいですね

藤田 昭人〔東洋情報システム〕

R. M. S. が身近な存在に感じられておもしろかった。

新美 誠〔慶應義塾大学理工学部〕

他では聞けないようなうら話まで聞けて大変良かったと思います。日本ではGNUのようなものが作れるかどうかはわかりませんが、GNUの思想は大切にしていきたいと思います。

これからは日本におけるFSFの窓口として頑張って下さい。最後に、SEA会員でもないのに、参加させていただきありがとうございました。

篠原 靖志〔電力中央研究所〕

雰囲気伝わってきてもおもしろかった。

神戸 隆博〔富士ゼロックス情報システム〕

R. M. S. の話など脱線のPartが面白かった! 普段、使用しているユーザとして個人単位では力になりたいと思っているのですが・・・しかし、何とんでもアメリカ

カ人のパワーを感じました。

樋口 千洋〔ニチメンデータシステム〕

GNU EMACS V19のスペックが面白かった。廊下で作業しているというのが印象深かった。

土田 泰治〔三菱電機〕

大変面白い話であった。このような話は、各所でどしどし行ってほしい。

石田 肇子〔日本電気〕

FSFで実際に体験したお話が何えておもしろかったです。何故このように遅い時間に開催されたかが少しわかった気がします。

松田 晃一〔日本電気〕

面白かったです。OHPのCopyがほしい。引地さんはボランティア？会社から給料をもらって行かれたのですか？SRAって面白そうですね。

山田 純生〔NIF〕

FSFの中の事、ストールマンの事、FSFの仲間の事・・・生の状況が聞けて非常に面白かった！！

萩原 高行〔CAC〕

- ・内容、プレゼンテーションとも素晴らしく、非常に満足しました。
- ・私自身はAdaをやっていますので、Emacs以外はほとんど利用していませんが、FSFにお金が行くように運動していきたいと思います。

【メール等での感想】

人見 庸〔ジェーエムエーシステムズ〕

遅くなりましたが、先日のSIGENVについての感想です。

盛況で、たいへん楽しい会でした。時間さえあればいくらでも話すことがあったような気がします。(あの時間内には何も発言できませんでしたが、...)

私は、去年のSDEシンポジウムのツアーでFSFへ引地さんご夫妻とストールマンさんを訪ねております。その時rms自身から直接お聞きした話などもでてきて、たいへん懐かしく思いました。

GNUプロジェクト自体については、これまで自分なりに理解していたその意義が再確認できたと思います。

私もどんなことができるか考えてみなければなりません。引地さんには日本でのGNUプロジェクト活動の先頭に立っていただかなければならないと思います。これからも頑張ってくださいませよう、よろしくお伝え下

さい。

長原 宏治〔富士ゼロックス情報システムズ〕

先日はどうもありがとうございました。とても楽しい&役立つ内容でした。

新しいGnuダイジェストをお送り頂けるそうで、誠にありがとうございます。引地さん達のご努力に敬意を払うと共に、心より感謝いたします。すっかりその気になって、ディストリビューションテープをFSFから買おうかな、なんて思っています。うるうる……円安が恨めしい！

上野 和明

感想の方をメールしようと思っていたのですがそれも失念しておりました。

私としてはよくやってるなあ、という感想だけですが企業の自分たちだけのための「おーぶん」思想にいかにして対抗して行くのだろうかと感心を持って見て行きたい、ということくらいです。取り合えずは...何とかせめて細々とでも生き残って欲しいものです。こんな企業でバイトとはいえ仕事をしている私にはあまりそんなこといえないかもしれませんが...

先日はありがとうございました。また何かありましたらよろしく願います。

折田 豊〔テーエステー〕

僕はパソコンのソフト開発を主な仕事としています。それも東芝のパソピア1600や日立の2020等、比較的マイナーなヤツをよくやります。そんなとき出会ったエディタがMicroEmacsでした。MicroEmacsは、どんなマシンでも選り好みしないので、非常に重宝しました。ちょっと漢字が苦手なのが残念でしたが。

雑誌でGNUプロジェクトを知り、リチャードストールマンという人が本家本元のEmacsを作ったと知り、興味を持ったのです。

FSFってのは、スゴイところだな、というのが僕の感想です。僕は、GNUのソフトは、一本も使ったことがありません(入手方法がわからなかった)GNU宣言(だっけ?)も読んでいません。

が、しかし、だいたい、理解したと思います。ソフトをつくって、みんなに配って、寄付金で食べるなんて、普通は考えるだけなのに実行までしてしまうなんて...MITっ子の粋みたいなものを感じました。

今度の仕事はSONYのNEWSなので、ぜひ、GNUのソフト(Emacs)を使ってみよう。

翌日、工学社の「ハッカーズ」を買いにいった私でした。

田中 慎一郎 (SRA)

FSFの話は、断片的には何度か聞いたことがあります。が、やっぱり面白いというか、興味深いものですね。

今回はSEAの会合だったにもかかわらず、SEA会員は参加者三十数名中十数名たらずという面白い人数比率を見ました。それも月例のSIGの案内を見ての申し込みはわずかに2件。ネットワークの重要性を感じさせられた一件でした。

うっ... フォーラムの感想になっていない... 引地さん、またよろしく。

渡邊 雄一 (電力計算センター)

とっても良い話だった。「FSFってどんなところ？」などという企画をしたのは、他ならぬこの私ですが、とっても満足しています。(不満なのは、自分がGNUの成果を使えるような環境にいないことです!)

敢えて非常に贅沢な要望を、付け加えさせて頂くならば、gccなど引地さんの係わったところの話を徹底的に話して下さっても良かったと思います。奥さんは「脱線ばかりで」と要らぬ心配をされていましたが、少なくとも私の考えるSIGENVはこういう会ですから、むしろこのような話は大歓迎です!

私も近くで研究者と言われる人を見ているので、ストールマンの机が整理されていないというのは良くわかります。ところで、ソフトウェアの著作権放棄の許諾書(?)をもらったストールマンはちゃんとその書類を管理しているのかなあ?

今まで、bitでの対談記事やGNUマニフェスト/GNUダイジェストさらに引地さんの記事でcopyleftの考え方など(少なくとも会場に来るような人には)しっかり分かっているのかなあとは私は考えていたのだが、どうもそうでないみたいです。

環境分科会からのお知らせ

我々環境分科会は、分科会運営側が単なる“お世話係”にならないようにという目標のもとに、活動を行なっております。具体的にいうと、月々の例会を講演会形式で行なうと、なれていない我々では設定に手間がかかるばかりで落ち着いて参加できない。しかも会場まで足を運べない人は参加できない。そこで例会はテーマを決めて「紙上討論」を中心に勉強会形式で行なうこととし、講演会形式は、「分科会主催フォーラム」という大胆な形で、年に2回ほど東京を離れて行なうことにしました。(これなら東京外の会員との交流もできるし、第一主催者側も楽しめる。)

以下に現在の活動状況等をご紹介します。面白そうだと思われた方は、是非ご参加ください。

紙上討論:

郵便、E-Mail等でご参加下さい。現在のテーマは「プロトタイピング」です。
(SEAMAIL Vol 4, No. 2-3 参照)

SIGENV-Forum:

1989年 3月 @盛岡 プロトタイピング&スキー
SEAMAIL 同上「SIGENV-Forum@MORIOKA 頼末記」参照。
1989年 10月 @神戸 ドキュメント&ジャズ
順次まとめて SEAMAIL にてご報告いたします。
1990年 1月 @盛岡 Mac / WS / メインフレーム (予定) & スキー & 温泉 (?)
今回は盛岡主催で、こちらがそれにのっかる形にしたいと思っています。

はっきりいって、大したことをやっているわけではありません。気軽に遊びに来て下さい。

連絡先: 世話人代表 田中慎一郎 (SRA)
TEL: 03-239-2729 (SDAプロジェクト直通)
E-Mail: tanaka@sra.cp.jp (junet)

会員の声

田中 一雄

科学技術関連、特に科学・医薬学関連の方とのコンタクトが欲しい。

編集部から： そうした同業の士との意見交換にぜひ SEAMAIL を役立ててください。それには、まず御自分がいま抱えている悩みや、技術上の問題点などをまとめて投稿してください。だれかからのレスポンスがあるでしょう。そんなことから、特定の関心事を論じ合う分科会が自然に生まれてくる……SEA はそういった「場」でありたいのです。

西澤 正宏

いつも、いつも、編集ご苦労様です。毎号楽しみにしております。私も社内でも技術誌の編集をしていて、原稿集めの苦労がわかるだけに、自分でも執筆しなければ、いつも申し訳なく思っております。近いうちに何か原稿を送らせていただきたいと思っています。ガンバッテ下さい。

福田 充利

SEA の BBS ができるとかいう話はどうなったのでしょうか？ BBS があれば、そこから記事を転載するなどできると思うのですが……？

編集部から： この問題は何回か幹事会で話しあわれたのですが、結論はでていません。いまの SEA の体力では、とても独自のネットは持てないので、既存のネットワーク上に News Group を作るしかありませんが、「たとえば junet をそんな風に使ったら？」という意見が一方にあります。

「しかし、会員のなかで junet にアクセスできるのはまだ少数だ。パソコンネットのほうがよい」、「だってあれは素人のためのメディアで、われわれプロフェッショナルが技術的な議論をするのには向いていない」、「でも現実にはパソコンネットのほうがアクセスしやすい」、「それではプロとしてあまりに情けない話だ。会社を説得して junet に入るくらいの意気込みがなければ……」といった具合です。

あなたはどう思われますか？ 御意見をどうぞ！

ちなみに SEA 事務局は、同じオフィスにある jus 事務局のマシンを借用して、sea@jus.junet というメールアドレスを持っています。junet に加入している方は、メールで原稿を送ってくださって結構です。

稲垣 浩一

月刊誌になってください。

新田 稔

最近、××会の報告といった特集が多くて、個々の会員の生の意見をのせた記事が少ないように思う。ページ数は少なくともよいから、もっと読んでおもしろい内容を期待する。

編集部から： いつもお願いしているように、それにはみなさんからの投稿がもっとたくさん必要です。

宮崎 真行

ずっと御無沙汰しております。事務局の隣にいるのに、ようすをのぞきに行けないほど忙しっております。そのうち(?) 何かの役に立ちたいですね。

細野 広水

「なかなか時間がとれなくて」といいわけをしながら、SEA のイベントには不参加の返答ばかり。地方に住む者としては、ワークショップのテープ起こしくらいがせめてもの参画かと、事務局にお願いしてテープを送っていただきましたが、そのまま1ヶ月以上が過ぎて、いまだに1文字も書いていない。ゴメンナサイ。夏休み頃には、頑張って軌道に乗せたいと思っています。

市村 保雄

米国以外(第3世界含む)のコンピュータ業界の動向を知りたい。

編集部から： 中国については、一昨年からはまった日中シンポその他のイベントで、動向がわかってきました。どなたか、他のアジア各国や、ヨーロッパ、またはオーストラリアに、仕事の関係で行かれた方、この号の大神原さんのサンノゼ紹介みたいな(あれほど詳しくなくても結構ですが)エッセイを書いてくださいませんか？

岸本 剛一

フォーラムに2回ほど出てみて、もう少し一般会員の発言がほしいと感じました。SEAMAIL でも、会員の自由な発言の欄(あるのかな?)がほしいですね。

編集部から： もちろん、この雑誌は全部のページが、会員の自由な発言にあてられています。御遠慮なく何でも書いてください。

松原 友夫

最近、何も書いていないのでうしろめたい気持ちです。ソフトウェアのカテゴリゼーション(たしか、5月に11th ICSE で Michael Jackson もいっていた)について書いて

みたいと思っています。

日逵 武彦

分科会は日曜日に開催していただきたい。たとえば、九州支部のそれは土曜日の開催のため、興味あるテーマでも参加できない。土曜日に仕事をしなければならない人のことも考えていただきたい。それに、福岡支部は活動しているのですか。

編集部から： そうした要望は、すべて関係する分科会や支部の世話人の方々と直接お話しください。曜日や時間の都合は、人によってまちまちですから、全員に具合よくは、なかなか行かないでしょうが....

松沢 好男

近頃、QC 等の品質管理活動が廃れてきているようですが、本当にこのままでいいのでしょうか？ 私は、ソフトウェア技術者の作業量（残業量）が多いことの原因の何%か（かなりの部分）は、低品質（バグ等）によるものと確信しています。古い QC に変わる手法や新技術の確立が必要な時期に来ていると思います。その意味から、SEA がガンバって突拍子もないアイデアをまじめに討論して欲しいと思います。

編集部から： 大阪の信頼性シンポ（もう10回目になりました）へぜひお出かけください。

中澤 融

いつも READ ONLY の取組み方しかできず、申しわけなく思っています。編集ボランティアの方々も大変だとは思いますが、これからもガンバってください。

瀬長 忠司

編集部、いつもご苦労様です（じっくり読んでいますよ！）。ところで、フレックスタイム制度が普及してきているようですが、実態はどうなっているのか、うまくいっている例、いっていない例、だれか知っている人がいたら教えてください。わが社はまだです。

熊谷 章

野村敏次氏の「お尋ねします」のアンケート結果をみて、うちのかみさんが言ったセリフ。「世の中には殊勝な奥さんがいるもんですね。それに較べて、B型の御主人は可哀想ねえ。あ、分かったぞ。あんたらが野村さんを異常だとか変だとかいじめるのは、本当は自分も野村さんのような1日を過ごしたいからでしょう。なあーんだ、そうだったのか」、だって。小生は、完璧に参ってしまいました。

匿名

ユーザーの電算室で働いているが、1年程前からヤル気を失ってしまっている。上司の無理解、情報の少なさ、エンドユーザーのわがまま等で頭を痛めている毎日です。転職を考えていますが、SEA 会員のみなさんは、転職についてどのようにお考えですか？ また、実際に転職した人の意見等も聞けたらと思います。

山口 均

いろいろな活動にできるだけ参加したいが、時間的な余裕がなく、まだ参加できないでいます。何んとか、ヒマを作るつもりですので、よろしく..いまは、パソコンの仕事から大型機の仕事に移行し、何もわからず仕事をしています。自分の方向性をまだつかめずにいますが、これから自分のやるべき分野をなんとか見つけ出したい。

福田 啓三

(1) みなさん方が扱われるソフトウェアは、大型(?)のコンピュータに関する議論が多い。私は、パソコン以下のファームウェアを扱っている。この種のソフトに関して、信頼性の保証技術はどうなっているのかを知りたい。

(2) 各種のイベントが2日間にわたるので出席しにくい。また、参加費1~2万円は高い。1日(土曜日)6時間程度で、もう少し安い会費のイベントを企画してください。

編集部から： (1) SEA 会員にも組込み型チップのソフトをやっておられる方はかなりいるはずですが。先日若手の会(盛岡)でもそんな話題が出ていましたし、大阪の信頼性シンポでも取り上げられています。ぜひ、こうした集まりに出掛けて、同業の士と議論してください(もちろん SEAMAIL 誌上での具体的な問題提起も大歓迎)。 (2) セミナーの値段は、会費収入の財政赤字を補う目的ですから、あまり安くはできません(それでも世間相場よりは割安になっているはず)。なんとか会社の教育予算を使って参加してください。土曜または日曜に気軽なイベントを作るという話は、ときどき幹事会でも話題になりますが、まだ実現しません。原因はボランティア不足。どなたか、世話人をやってくれませんか？

権熊 敏朗

この業界で働く人々にとって、恵まれている環境と恵まれない環境の格差は、著しいものがあります(どうも、世界観そのものがまるで違うようです)。最近話題になっている「1人1台のワークステーション」とか「分散ネットワーク環境」とか「ハイパーなんとか」とか「プロトタイプイング」とかいうのは、まったく恵まれた世界の話だと思います。

恵まれていない環境にいる人間にとって、そうした恵まれた世界の情報を得るには、自腹を切って書籍を買い込んだり、シンポ等に参加したり、かなり無理をしなければなりません（もちろん、そんな人間は少数派で、周囲からは変人扱いされます）。

その点、SEA のフォーラムは、比較的安い費用で、生きた情報が聞けるので大変ありがたいです。分科会になると更に興味深い話がうかがえることでしょう。ただ、こちらから話題を提供するとすると、みなさんに議論していただける程の水準のものは、私の周囲からは、なかなか見せないのが実情です。

内藤 昌彦

船便でもけっこうです。もう少し、おもしろくまた、有意義な機関誌にして下さい（たとえば、新しい計算機や技術の情報をのせるとか？）。

福島 秀明

一般の民間企業では、当面の業務遂行がどうしても優先されがちになります。一昨年は、Unix マシンの商品化事務局の担当をしたため、各種分科会で色々な勉強をさせていただきました。いまは SEAMAIL をみながら、ボランティア活動を支えられている諸兄諸姉のご活躍のようすや、動向を拝見させていただいております。日本の土壌に定着する文化的活動の草の根的なガンバリを期待しています。

久保 宏志

「富士通におけるソフトウェア品質保証の実際」と題する本を、私の監修で出します。9月13日に印刷が上がり、書店には9月20日頃出ます。出版社は、日科技連出版社です。会員のみなさんと同様に、毎日ソフトウェア開発の現場で富士通の技術者たちが実践しているソフトウェア技術の実態について語っています。ソフトウェア工学のようなカッコいい話は出てきませんので、親しみをもって読んでいただけるものと期待しています。執筆者たちが書きに書いたので分厚くなって、値段がちょっと高くなったのが難点です。しかし、これも私を介していただくと、格安に購入できます。お手元に1冊いかがですか？

斎藤 末広

広告でもなんでもよいので、NY Times の日曜版のような SEAMAIL にしてほしい。

編集部から： SEAMAIL の正確上、広告はちょっと無理でしょう。NY Times と張り合うつもりはないし、あってもできません。

匿名

最近、当社では会社をやめる人間がかなり増えている。月に1~2人は辞めるようである。今年の新入社員が18名であるから、入ってくる人より出て行く方が多いかもしれない。このような状況下では、私もついつい転職を考えてしまう。これが当社だけの現象であれば、そろそろあぶないのではないかと思う。また、もしこれが一般的現象だとすると、この業界の先行は暗いかなと思う。TV コマーシャルを見ていると、最近は転職は一種の流行のような感があるが、いったいどのような実態なのだろうか？ SEA で調べられないだろうか？ 適当ではないかな？ もし適当でなければゴメンナサイ。

木全 洋

「読者の声」や「書評」や「Unix や X-Window に関する本の案内」のコーナーを設けて欲しい。誌上で名刺交換をする（所属、仕事の内容、興味あるテーマ、所属支部等）。そして、交流が始まる。

編集部から： 何度もいいますが、SEAMAIL のすべてのページは、会員の声のページです。イベントの報告（本来は別の報告書いまとめた）やこうしたアンケートの紹介は、会員からの投稿が少ないので、編集ボランティアが苦しまぎれにやっているのだということをお察しください。書評も、書いていただければ、すぐのせます。

安西 宏

みなさんの毎日は、多分ドロクさい仕事の連続だと思えます。SEAMAIL への投稿も無理に抽象化せず、ドロツキのままぶつけてみたらどうでしょう。わけの分からないつぶやきより面白くなると思います。オレは天下の技術者ナリという意地やメンツが文面にあまり出ていないように感じられます。

下司 英機

私にとって、SEA とは何か？ SEA が具体的に与えてくれる利益は？名古屋支部の集会にも1回参加したただけだが、小規模な仲間の集まりという印象だった。やはり名古屋は地方都市か？

SEAMAIL の記事は、プログラマまたは Unix ハッカー（オペレータ）向きのものが多いようだ。いまどき Unix を知らないものはソフトウェア技術者ではないという感じ。SEA の SE とはプログラマまたはオペレータを指しているのかと思いつつ、もう1年間ようすを見ることにしよう。もっと、広義の Software Engineer に興味のある記事を期待する（でも原稿が集まらないかな？）。

近頃アタマにきたことども

先月のアンケートで、ちかごろ「バカヤロー」とどなりなくなったことはありませんか？という設問をもうけたところ、いくつかの回答がありました。内容の性格上すべて匿名で採録しました。

[1] 任期満了で退任したのに、いまだに悪さをするゾンビのような元役員。現業部門を動力供給源なしで動く永久機関としか見ていない現職役員。両方ともバカヤロー以外の何ものでもない。どなたか、成仏させる呪文を御一報下さい（感謝）。

[2] バカヤロー！とまでは思いませんが、仕事の関係で使っているビデオの録画予約の仕方のわかりにくいこと、きわまりない。これこそ、まさにコンピュータ屋の発想で組みやがったなとすぐわかる同業者ゆえの腹立たしさ。仕方なくマニュアルを見るとこれもまたわかりにくい。頭にきてよいやら反省してよいやら....

[3] 私は今年34歳になりますが、転職後の会社で「その年齢で、性格、外見も悪くないのになぜ独身なのか？」と聞かれて、マイッテます（ちなみに、私は、女性専門で、かつ遊び歩いているわけでもありません）。他人が結婚しているようがいまいが、カラスの勝手だろ！大きな御世話だ。バカヤロー！！結婚してりゃいいってもんじゃないんだ！！

[4] 我社のバカは、比較検討もろくにせず、1000万円も使ってPRIDEなる方法論を導入した。これが実に古いしるもので、今から15年も前の産物。情報に関する技術の進歩は激しいのに、マニュアル5種類だけでこの値段。これでは会社もたまらないだろう。今後方法論を考える人は充分心してください。

[5] 自分の会社の技術力や環境があまりにも情けないので、改善のための提案を（かなり強力的に）述べたところ、それに対する社長の答えというのが「君はどうも最近あせりすぎているようだね。まだ独身でいるからそんなことになるんだ。嫁さんでももらったら落ち着くんじゃないのか」。まったく余計なお世話だ。いったい、かれはどういうつもりで人の話を聞いていたのだろうか？

[6] システムのデバッグは、まず「自分をうたがう」ことから始まります。あるモノをつないでデータのやりとりをハードウェアで行っていたのですが、「動きがおかしい」とすぐ、「そっちの方で何かしていない？」。

他人に聞かないで、まず自分が作ったインターフェイス（ハードウェア）を疑いなさい！ほーら、結局あなたが焼いたROMがおかしかったんでしょ！

このように、間違っているのは他人と考えて行動するのは、ハードウェアの人に多いようです。ソフトウェア屋は

ケンキョです！？

[7] 宮崎勤の事件で、ホラービデオ規制に走る政府。バカヤロー！（私は、あんなビデオがいくら出て来ても、ぜったい見ない！！）最近、三流芸能記者になってしまった政治記者。アホ！

[8] おい、こら近頃の若い人（ある特定の人を指しています）。進捗をチェックすればいやな顔。まかせておけば確実に遅れる。作ったもののテストは完全に終わったことがない。自分で作ったバグだらけのプログラムをデバックできない。そんな若い人を見ると、私は悲しい

[9] 経験と仕事の内容のリンクがとられていない（コーディングこそが、技術であるという考え）。残業を多くした人間が偉くて、給与が高くなる（仕事の質は、問わない）。人が減ってゆく（転職）ことを、固定費削減だと喜ぶ経営者。

[10] 17:30（定時）を過ぎてしまうと、わが職場はクーラーが止まってしまう。これでは、暑い日は労働意欲が損なわれる。また、我が社には自社ビルがなく社員は皆ばらばら、社員食堂もない。おまけに会社の分離、これでは一歩間違えば、ただの人材派遣会社ではないか！

[11] NECのバカヤロー！N5200では、PTOS以外でマウスが使えない。自分で作ろうとしたら、情報を公開しない。ソフト屋をなめるんじゃねーぞ！てめーらのオフコンは、絶対どんな事があっても、ユーザにすすめない。

[12] 元号の強制的な使用には反対します。少なくとも、年号の表示は西暦もしくは、西暦と元号の並記して下さい。元号制度は前近代的な制度だと私は思います。

[13] 顧客に：ちょっとシステムの動きが気に入らないからといって、ねちねち、ねちねちと、文句をいわないで、人の話にちょっとは耳を傾けたらどうなんだ！！それに、異常でもないのにトラブルとして連絡をよこすなんて、もっとしっかりと、確認してからにしてね。このあいだなんか、仕様変更なのに、トラブルのなかにまぎれこませて連絡してきたりして、けじめは、ちゃんとしてきましょう！！

[14] 上司に：部下にばかり責任を押しつけないで、すこしは、週間報告をまともに読んで、プロジェクトの勉強をしたらいかか！！

[15] 元メンバー（社員）に：いくら今の仕事が忙しいのか知れないけれど、自分が作ったプログラム・バグの面倒ぐらい見ろよな！

[16] 元メンバー（外注さん）に：金をだすから、そんなにいやがらずに、バグの調査してよ！！

SEA会員状況 (平成元年10月12日現在)

正会員	1699名
賛助会員	65社

<男女分布>

男	=	1611
女	=	88

正会員の勤務地および居住地域分布

	勤務地域	居住地域
北海道	= 10	10
青森	= 0	0
山形	= 1	1
宮城	= 6	5
岩手	= 10	10
福島	= 1	1
秋田	= 1	1
新潟	= 7	7
栃木	= 6	6
群馬	= 5	4
茨城	= 12	13
埼玉	= 21	125
千葉	= 22	101
東京	= 897	534
神奈川	= 138	309
山梨	= 1	1
長野	= 36	37
富山	= 3	3
福井	= 4	3
石川	= 3	3
静岡	= 19	19
岐阜	= 2	8
愛知	= 58	47
和歌山	= 2	3
三重	= 1	4
滋賀	= 11	12
京都	= 23	32
大阪	= 232	172
奈良	= 4	14
兵庫	= 38	71
愛媛	= 2	2
徳島	= 6	6
高知	= 0	0
香川	= 1	0
鳥取	= 0	1
島根	= 1	1
岡山	= 2	2
広島	= 5	5
山口	= 0	0
福岡	= 18	20
大分	= 6	6
熊本	= 33	32
長崎	= 0	0
宮崎	= 1	1
佐賀	= 1	1
鹿児島	= 5	5
沖縄	= 1	1
韓国	= 1	1
米国	= 4	4
豪州	= 1	1

<年齢分布>

20以下	=	0
20_24	=	38
25_29	=	332
30_34	=	462
35_39	=	391
40_44	=	290
45_49	=	119
50_54	=	32
55_59	=	18
60以上	=	15

<血液型分布>

A型	=	658
O型	=	491
B型	=	372
AB型	=	178

賛助会員会社名

ジェーエムエーシステムズ, 日本システム, リコーシステム開発, SRA, 辻システム計画事務所, PFU, 近畿日本ツーリスト, 東電ソフトウェア, セントラル・コンピュータ・サービス, 日本能率コンサルタント, 構造計画研究所, ケーシーエス, サンビルド印刷, 日本システムサイエンス, 富士ゼロックス情報システム, IN情報センター, 富士通, エムテイシー, クレオ, 情報システムサービス, インターナショナル・データ・リサーチ, 日立ビジネス機器, アトラス情報サービス, 三菱電機セミコンダクトソフトウェア, 伊藤忠エレクトロニクス, 三菱電機, 富士通BSC, 千代田製作所, 村田技研, ニコンシステム, 日本ビジネスデータプロセッシングセンター, 阪神計算センター, 昭和電工コンピュータサービス, エヌ・ティ・ティ・システム, 日本情報システムサービス, ヒラタ・ソフトウェア・テクノロジー, 日本エム・アイ・シー, 日本電気ソフトウェア, ソニー, コマス, 三菱電機コントロールソフトウェア, インターフィールド・システムズ, ジャストシステム, マイクロリサーチアソシエイツ, 松下ソフトリサーチ, シャープ, 東洋エンジニアリング, 日本ユニシス・ソフトウェア, 清風オフィスメーション, 新日鉄情報通信システム, テックシステムズ, 熊本電子計装工業, NTT九州技術開発センタ, 立石ソフトウェア, 三菱電機関西コンピュータシステム, 日立エンジニアリング, スイック, テスク, リコー, 三菱電機東部コンピュータシステム, カシオ計算機, キヤノン, ソフテック, 富士写真フィルム, 中央システム

ソフトウェア技術者協会 (SEA) 入会のおすすめ

ソフトウェア技術者協会 (SEA) は、ソフトウェアハウス、コンピュータメーカ、計算センタ、エンドユーザ、大学、研究所など、それぞれ異なった環境に置かれているソフトウェア技術者または研究者が、そうした社会組織の壁を越えて、各自の経験や技術を自由に交流しあうための「場」として、1985年12月に設立されました。

その主な活動は、機関誌 SEAMAIL の発行、支部および研究分科会の運営、セミナー／ワークショップ／シンポジウムなどのイベントの開催、および内外の関係諸団体との交流です。発足当初約 200人にすぎなかった会員数もその後飛躍的に増加し、現在、北は北海道から南は沖縄まで、1700名近くのメンバーを擁するにいたりました。法人賛助会員も約 60社を数えます。支部は、東京以外に、関西、横浜、長野、名古屋、九州の各地区で設立されており、その他の地域でも設立準備をしています。分科会は、東京、関西、名古屋で、それぞれいくつかが活動しており、その他の支部でも、月例会やフォーラムが定期的に開催されています。

「現在のソフトウェア界における最大の課題は、技術移転の促進である」といわれています。これまでわが国には、そのための適切な社会的メカニズムが欠けていたように思われます。SEA は、そうした欠落を補うべく、これからますます活発な活動を展開して行きたいと考えています。いままで日本にはなかったこの新しいプロフェッショナル・ソサイエティの発展のために、ぜひとも、あなたのお力を貸してください。

個人正会員の入会金は 3,000 円、年会費は 7,000 円 (入会時の払込は合計 10,000 円) です。法人賛助会員は、年会費 100,000 円です (入会金はなし)。会員には、毎月機関誌 (A4 判約 30 ページ) が配布されます。また各種のイベントには、すべて会員価格で参加できます (法人賛助会員会社の社員は、会員扱いとなります)。

入会ご希望の方は、下記の申込書に必要事項をご記入の上、郵便または FAX で、事務局までお送り下さい。折り返し、会則、機関誌最新号、会費振込用紙などをお送りします。

申し込み先

〒 102 東京都千代田区隼町 2-12 藤和半蔵門コーポビル 505 ソフトウェア技術者協会

TEL 03-234-9455, FAX 03-234-9454

SEA 入会申込書 (正会員) 89-10

氏名: _____ (ふりがな: _____)

年齢 ____ 才 性別 (男 女) 血液型 (A O B AB)

勤務先名: _____

所属・役職: _____

勤務先住所: (〒 _____) _____

勤務先TEL: _____ - _____ - _____ (内線 _____)

勤務先FAX: _____ - _____ - _____

自宅住所: (〒 _____) _____

自宅TEL: _____ - _____ - _____

連絡先 (どちらかにチェック) 勤務先 自宅

SEA 入会申込書 (賛助会員) 89-10

会社・団体名: _____

代表者氏名: _____ (ふりがな: _____)

連絡担当者: _____ (ふりがな: _____)

所属・役職: _____

住所: (〒 _____) _____

TEL: _____ - _____ - _____ (内線 _____)

申込口数: _____ 口



ソフトウェア技術者協会

〒102 東京都千代田区隼町2-12 藤和半蔵門コーポビル505
TEL.03-234-9455 FAX.03-234-9454